

RED KING CRAB 第3回公演

(baka)

作・演出  
竹原 圭一

この物語は  
最愛の人をなくした  
とある男の自立の物語。





作・演出

RED KING CRAB

竹原 圭 1



宣伝チラシ（表） デザイン チヤ ゲンタ

# RED KING CRAB 第3回公演 (baka)

11月13日 fri 20:00 14日 sat 14:00 20:00 15日 sun 13:00 18:00  
November

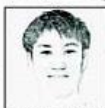
作・演出

出演

※開場は開演の30分前



竹原 圭一  
(RED KING CRAB)



能登屋 駿介  
(RED KING CRAB)



淡谷 優



塚本 奈緒美  
(RED KING CRAB)



和泉 遼  
(RED KING CRAB)



高野 紗綾



木山 正太



大湊 敬太



石橋 徹城

映像制作・監督……石橋 徹城  
音響……江口 隆昭  
照明……鈴木 静吾

制作……小川 しおり (RED KING CRAB)  
制作……榎谷 史奈  
舞台美術……米沢 春花 (RED KING CRAB)  
宣伝美術……チャゲンタ

小道具……堀名 里美 (COLORIST)  
小道具補佐……松浦 ひかり  
演奏指導……大蔵 まみこ  
音楽……山崎 耕佑

一般 ￥1500  
高校生以下 ￥1000



本公演はクラウドファンディングで実施されます。

※会場までのお帰りの交通費は事前にご連絡ください。

■問い合わせ

メール hokkaidoredkingcrab@gmail.com  
TEL 090-7052-7030

アートの入口 さっぽろアートステージ 2015 Sapporo Art Stage

演劇専用小劇場 BLOCH

札幌市中央区北3条東5丁目5 岩ビル1F



宣伝チラシ(裏) デザイン チャ ゲンタ

緑川

たんぽぽ（25歳）

中度の知的障害と自閉症を持つ。愛情いっぱい母親に育てられたが、母親が他界後、施設に入るが脱走。放浪の旅に出る。趣味は張り絵。警察に保護され、つくしの紹介で、この株式会社アポロにやって来る。勉強は出来ず、運動神経もよくない。10歳程度の知能。お母さんから言われた、「辛い時こそ笑顔」という言葉を大事にしている。メタ言語が苦手。自閉症の為、わかりやすく具体的に指示しないと何をしてもいいかわからない。つくしの死をきっかけに、自立を考える。好きな食べ物はお菓子全般。

白井

つくし（23歳）

たんぽぽの幼馴染。元ソフトボール部。男っぽいサバサバした性格。将来の夢はパティシエ。アルバイト・パートとしてアポロにやって来る。

幼少期はたんぽぽを頼れる兄貴として慕っていたが、ここに来てからは自分がたんぽぽのお姉さんのように振舞う。風が丘支援センターの現状に憤慨し、変革を求める。

青木 はこべ（24歳）

通称、アオキン。平和主義者。度が付く程のお人よし。中々NOと言う事が出来ない。ナヨナヨしている。他人の恋愛には疎い。見切り発車で突拍子もないことを言うので、周囲から信頼が無い。時間やこだわりが強い。特技は手品。元サラリーマンで、経理を担当していた事から数学には強い。

黄瓜 すぎな（30歳）

通称、きゅーり。職業は米農家。通称、スギ兄い。趣味は料理。長淵剛が好き。シャイアンのような性格。たんぼぼの頼れる兄貴的存在。曲がった事が大嫌いで、感情的になりやすい。涙もろく情に脆い。職人氣質で、細かく教えるのは苦手。力仕事は得意だが、手の抜き方を知らない。勉強は全くできない。見栄っ張り。強情。頑固。

桃瀬 よもぎ（22歳）

通称、モモちゃん。高校の時からホステスの仕事を行っており、接客や観察眼に優れている。感情よりも論理派。年の割に大人びている。職場ではお茶出し係。それ以外の仕事はしない。常に携帯をいじっている。口癖は「別に」。他人に厳しく、自分に甘い。よく寝坊や、遅刻をするためを怠け者の為、皆からサボりのモモと呼ばれている。愚痴ばかり言う。ツイッター等のSNSに本音

をぶちまける。愛人氣質。皆の相談役。

### 茶志内 くず（35歳）

通称、くずさん。ロハ丁手八丁。周囲からの信頼はない。決して悪い人ではない。金が無いため、金儲けしか考えていない。大学を6年留年したのち、単位不足のため、除名処分となり、その後、ススキノで歌手をしていた経験を持つ。自身でCDを制作。タイトルは「どんづまり」。知人数名にしか売れることなく、借金地獄。その後、俳優を目指そうと市内の有名劇団「ドリーマーズ」に入るが、チケットノルマに耐えられず退団。その後は、キャバクラ通いが日課となり、その時に通っていた店のホステスを引き抜き、職場で働かせる。風が丘作業所の施設リーダーを行う。前任が病気の為、急遽ピンチヒッターとして昇格。根暗。マイペース。基本無口。足が臭い。嫌味を良く言う。他者を比較してモノを言う。激しいジエラシーを持っており、汚名を挽回していく。自分以上に周囲を纏めていく、人間が憎い。

### 赤谷 よし（24歳）

職業はギャンブラー。確率論には強い。仕事に遣り甲斐を見出せずにいる。通称、ヨッシー。趣味はギャンブル。樂觀主義。ヨモギの言う事なら何でも聞く。車が趣味で大金を叩いて買った。赤のシンディローバーを何よりも大切にする。



借金返済の為、たまたま受けた面接で、くずに儲け話を話し、採用になる。他人に流されやすい性格。仕事は手段という哲学を持っており、プライベートルな時間を何より大切にしている。たんぼぼを勝手にライバル視している。

## 灰原 すすき（30歳）

職業は米農家のお手伝いの傍らで劇団の主宰。現実主義者。自慢話を良くする。劇団「ドリーマーズ」の座長。思い込みが激しい。損得でモノを考える。芝居の事になると人間が変わり、オカマ言葉になる。障害に対して激しい偏見を持っている。

## 舞台について

舞台は架空の田舎町。周囲を山々に囲まれた風が丘町にある、株式会社アポロ。ここではお菓子の製造補助や、農作業、運送業などの人材派遣業務を行っている。

舞台下手前方には、出入り口となる扉。扉の横に事務所机と椅子二つ。

上手袖に通じる通路はトイレや、炊事場と繋がっている。3人掛けのソファあり。そして、舞台中央後方には、庭に通じる大きな窓があり。

その窓の奥には、約、1メートル80センチほどの高い外壁と、土の床。そして床とコンクリートとの間に、たんぼぼ一輪とつくしが咲いている。

この建物がこの外壁に囲まれていることがわかる。

内装全体は白い壁と所々に茶色の木が柱として垣間見える。

所々、傷や汚れがあり、建ってから数年が経過していることがわかる。

客入中、舞台上は黒い幕で隠されており、内側が見えなくなっている。



2015 年 (baka) 初演時の舞台セット/米澤 春花 (劇団 fireworks) 作製

## ○プロローグ

舞台上が黒幕に覆われている。

2006年 春 昼 快晴

風が丘作文コンクール会場

係員、登場し、マイクスタンドの前に立つ。

係員、一礼

係員

「あ、あ、えー本日は風が丘作文コンクールにご来場頂きまして、誠にありがとうございます。開催の前に2、3ご案内をさせて頂きます。まず、場内では携帯電話等の電子機器の電源はOFFをお願いします。次に、終演後にパンフレットに織り込まれているアンケートの記入にご協力お願いします。三つ目、上演中、もしも義気分の悪くなったお客様はお手を上げて合図を下さい。係員がご対応致します」

係員、少し碎けた様子で

係員

「かつては農業の中心都市として栄えた風が丘ですが、深刻な財政難のあおりを受け、2005年3月11日をもって財政再建団体に指定され、事実上、財政破綻をしました。最盛期からの人口減少率は、全国の自治体でもトップクラスです。多くの若者たちが中央に向かうのは時代のせいなのでしょう。夢を持った若者

の事を思うと、複雑な気分となります。私達に出来る事は、今は元気のなくなつてしまつたこの町に、再び当時の活気を取り戻すこと。その強い意志を持つて、これから私達、町民も再建に取り組んで参りたいと思う所存であります。これから受賞者が自身の作文を読み上げます。読み終えたあかつきには皆様の温かい拍手でお答えいただければと思います。よろしくお願い致します。お話が長くなりました。ご案内は以上となります。それでは、登場して頂きましょう。風が丘養護学校3年C組、緑川たんぽぽ君です。拍手でお出向かい下さい」

胸に花（カーバラ）を着けた、たんぽぽが登場。

たんぽぽ、マイクスタンドの前に立つ

たんぽぽ、緊張している

たんぽぽ「…僕の夢。風が丘養護学校3年C組、緑川たんぽぽ。僕は——、あれ？」

つくし、急いでカンペを出す

たんぽぽ「僕にはたくさん壁があります。その壁を壊したいと思うけど、バカだから壊せない。頭が良くなって、色々な事が出来るようになっていきたいけど、中々出来ません」

たんぽぽ、上を向き、堂々と

たんぽぽ「だけど、僕にはやりたい事があります。それは車の運転です。車があれば、

行きたい所に、いつでも行くことが出来ます。しかも僕は車が大好きです」

日の光がたんぼぼを照らす

たんぼぼ「ディーゼルエンジンが唸りを上げる。チューンナップしたステレオから音楽が流れる。僕はハンドルをガツシリ握り、道央自動車道を飛ばします」

たんぼぼ、穏やかになって

たんぼぼ「いつか僕は当たり前のように車に乗って、大切な人と一緒にドライブをします。それが僕の夢です」

つくく、拍手する

観客も連られて、拍手する。拍手の音が徐々に雨だれに変わる

暗転

# ○たんぽぽの発見

暗転中

2015年 秋 夜 大雨

劇場内に大きな雨の音が響き渡る。

たんぽぽ、舞台の上手前方で蹲っている

アオキン、傘をさして登場

アオキン、懐中電灯を持って、辺りを照らす

アオキン、たんぽぽと思しき人を発見し、懐中電灯で照らす

ホームレス、慌てて飛び出す

アオキン「――」

アオキン、再び、辺りを照らす

たんぽぽ、懐中電灯で怯えている

アオキン、たんぽぽに近寄って、自分にさしていた傘を、たんぽぽに傘をさす

たんぽぽ、アオキンを見る

アオキン「――たんぽぽ」

暗転

## ○春の朝

2015年 春 朝 快晴

株式会社アポロ一室 朝

雀の鳴き声が聞こえる

株式会社アポロ一室 朝

黄瓜、青木、桃瀬、灰原、仕事の用意をしている。

茶志内、登場

茶志内「おはよう」

一同 「おはようございますー」

たんぽぽ、つくし、登場

つくし 「おはようございますー。すいません、遅くなりました」

たんぽぽ 「——」

茶志内 「お、彼がタンポポ君」

つくし 「はい」

茶志内 「たんぽぽ君、私がここの責任者の茶志内です。よろしく」



たんぽぽ 「はい、よろしく願います」

茶志内 「たんぽぽ君、ここで大事なことを言つよ。まずは挨拶を覚えること、そして周りの人に積極的に話しかけること、この二つを守って、早く職場に溶け込むようにしなくちゃならない。ここは学校じゃないんだから。誰も教えてくれない。君が自分で覚えようとしなければ何も覚えられない。たんぽぽ君、わかってる？」

つくし、たんぽぽを気にしながら

つくし 「たんぽぽに期待してるんだよ」

たんぽぽ 「はいー!」

茶志内 「いい返事だね。君が本当に頑張ったかどうかを決めるのは、君じゃない。この会社なんだ。それを忘れないように。もちろん頑張れば、給料も上がる。頑張れなければ辞めてもらうしかない」

アオキン 「――」

茶志内 「だから、しっかりと真面目に働くように」

たんぽぽ 「わかりました」

茶志内 「いい返事。えー皆さん」

一同、手を止めて

茶志内 「今日から新しく働くことになりました、緑川たんぼ君です。どうぞみなさん、親切に丁寧に教えてあげて下さい」

つくし 「自己紹介して」

たんぼ 「緑川たんぼです。よろしくお願いします」

つくし 「——」

つくし、拍手

一同、疎らに拍手

たんぼ、笑みを浮かべ、つくしを見る

つくし、たんぼの視線を感じ顔く

茶志内 「じゃあ、ここのスタッフを紹介します。前持って言うておくけど、ここにいる人達は、皆着ている服の色の名前覚えてたほうがいいよ。まず黄色い服を着ているのが、僕の次にキャリアの長い、黄瓜さん」

たんぼ 「きゅーりさん」

黄瓜 「違っ、黄瓜。よく間違えられるんだよな。これからよろしくな」

たんぼ 「よろしくお願いします」

茶志内 「次に灰色の服を着ているのが、黄瓜さんと同期入社の灰原さん」

灰原 「わかんない事があったら、俺に何でも聞けよ新入り」

たんぽぽ 「よろしくお願いします」

茶志内 「そして次が白い服を着ている、白井つくしちゃん・・・」

つくし 「私は飛ばしちゃって大丈夫です」

茶志内 「あ、そうでしたそうでした。次にピンク色の服を着ているのが、つくしちゃんの次に入社した、桃瀬さん」

桃瀬 「たんぽぽ君、よろしく。コーヒー飲む?」

たんぽぽ 「はい」

茶志内 「いい返事だね」

たんぽぽ 「ありがとうございます」

茶志内 「続いて青い服を着ているのが、青木君。主に清掃業務を担当してもらってる」

アオキン 「――」

アオキン、反応せず、掃除を辞めない

茶志内 「アオキン」

アオキン 「――」

茶志内 「こちら、青木」

たんぽぽ 「――」

アオキン 「はい」

茶志内 「自己紹介」

アオキン 「青木です、よろしくお願いします」

たんぽぽ 「よろしくお願いします」

茶志内 「場合によっては、彼のようにここの清掃とかもやってもらいたいところがあるから。じゃあ、紹介はこれで終わり。皆仕事の用意に戻っていいよ」

一同 「はい」

茶志内 「おいアオキン、そんな汚い奴で拭いてんのか。もっと綺麗な雑巾あったろう」

アオキン 「すみません」

茶志内 「例えば、こういう所とかもね、忘れずに」

桃瀬 「あのつくしさん、仕事行く準備しなくていいんですか」

つくし 「あ、そうだ」

つくし、退場しめあしめ

桃瀬 「たんぼぼ君、砂糖とミルクは」

たんぼぼ 「え」

桃瀬 「だから、砂糖とミルクはどうする」

つくし 「あ、お砂糖とミルクはコーヒーに何個入れますかって聞いてるんだよ」

たんぼぼ 「ああ、そういう事。いれません」

つくし 「彼は具体的に指示しないとわからないんです」

桃瀬 「あ、そう」

灰原 「ていうか茶さん、仕事の説明、もういいんですか」

茶志内 「あ、そうだそうだ。たんぼぼ君、ごめんごめん。話の続きだけだね、うちの仕事は主に、基本、清掃業とか、運送業、土地柄、農作業の補助。近くのお菓子屋でお菓子作りの補助を行って貰う事もある。この町、爺ちゃん婆ちゃんばかりだから人手不足なんだわ」

たんぼぼ 「——」

茶志内 「今日は、せっかくだから、つくしさんに着いて、色々覚えてもらおうか」

たんぼぼ 「はい」

茶志内 「だから桃ちゃん、黄瓜、今日は2人農作業代わりに行って」

黄瓜 「わかりました」

会社の固定電話が鳴る

茶志内、退場しかけて

桃瀬 「え、嘘」

茶志内 「ほら準備して」

茶志内 「あ、ごめん電話だ。じゃあ後はつくしちゃんが来たら、何するか聞いてね」

たんぽぽ 「はい」

茶志内、電話を受けている

茶志内 「もしもし、あ、どうもお世話になっております。株式会社アポロでございます」

黄瓜、たんぽぽに近寄って

黄瓜 「お前、いくつだ」

たんぽぽ 「25です」

黄瓜 「おーそうかそうか。入りたて、色々不安な事もあると思うけど、わかんない事

あったら何でも聞けよ」

たんぽぽ 「はい」

黄瓜 「よろしく」

黄瓜、握手を強要する

灰原 「頼りにしてるからな。ここでは資材と苗とかは込んだりするから、最悪、マニュアル車の免許は持って欲しいんだけど、何持ってる」

たんぽぽ 「まっぴる」

灰原 「は？それ今持ってるもんだろ」

つくし 「たんぽぽ、とりあえず、向こうにあるロッカー室でこれに着替えて来て」

つくし、たんぽぽにアポロの制服を渡す

たんぽぽ 「はい」

つくし、駆けつけ

つくし 「たんぽぽは免許は持っていません」

灰原 「え、現場に行くなら車乗ること結構あるんだよ、ないと色々困るんだよなあ」

つくし 「すいません」

灰原 「でもまあ、仕方ないか。彼、免許取るの無理そうだもん。他にも色々仕事覚

えて貰わなきゃいけないし」

つくし 「――」

黄瓜 「どうしたの、つくしちゃん。糞でも我慢してるような顔して。お便秘か」

つくし 「違っよ。今日はみんな、やけに優しくて、なんか不気味」

灰原 「そんなことないよ、いつもこんな感じだよな。なあ」

アオキン 「あ、はい」

黄瓜 「新人には優しくしないと。また辞めて貰っちゃあ困るから」

桃瀬、登場

桃瀬 「あーあ」

つくし 「モモちゃん、ごめんね」

桃瀬 「いいですよ、別に。仕方ないですよ。新人の為ですから」

つくし 「ありがとう」

桃瀬 「いえいえ」

つくし 「皆さん、いいですか」



黄瓜 「なになにつくしちゃん」

つくし 「たんぽぽの事で、色々わからない事もあるかと思いますが、もし何かあったら私に聞いて下さいね」

灰原 「優しいねえ、つくしちゃんは」

たんぽぽ、登場

茶志内 「じゃあ、それぞれ行く準備して。外のハイエース。4019に黄瓜とモモちゃん。3012に灰原、つくしにたんぽぽ君で」

一同 「はい」

一同、そろそろ中央のベランダから外に出る

つくし、外に出て、立ち止まり

つくし 「あつ、ちょっと待ってて」

たんぽぽ 「うん」

アオキン 「――」

たんぽぽ 「青木さん、車乗らないんですか」

アオキン 「僕はね、乗れないんだ。別の現場に行くから」

たんぽぽ「——そうなんですか」

黄瓜「おい、アオキン。時間あるなら、こころ辺綺麗にしとけよ」

アオキン「——はい」

つくし、ししじ本を鞆にしまっ

つくし「ごめんごめん、これ、あとでたんぽぽにも見せてあげるからね」

たんぽぽ「うん。ねえ、つくし、見て」

つくし「なになに」

たんぽぽ「これ」

たんぽぽとつくしが並んで綺麗に咲いている

つくし「あ、並んで咲いてる。珍しいね」

たんぽぽ「うん、たんぽぽとつくし」

つくし「あ、一緒だね」

たんぽぽ「一緒」

黄瓜「おーい、そんなの良いからー行くぞ」

黄瓜、退場

つくし 「はい。ほら座ってないで、行こう、たんぽぽ」  
たんぽぽ 「うん」

たんぽぽ、つくし、退場

アオキン 「——」

アオキン、掃除をしている

## ○春の風景描写

たなほほつへきが象徴的に照らわらる。

たなほほつへきが風に揺られて、カーテンがそよ風で揺れてる。

## ○春の夜

2015年 春 夜 晴れのち曇り

板付き「茶志内、灰原、黄瓜、桃瀬、アオキン」

桃瀬、カーテン、窓を閉める

灰原 「え、お前の時も」

黄瓜 「そう。ボケーっとして仕事しないんだよ」

桃瀬 「私もさ、時々会話通じなくて、イライラすんだけど」

黄瓜 「わかるわー」

灰原 「茶さん、そういう事だから」

茶志内 「わかったよ」

たんぽぽ、ドアから登場

たんぽぽ 「つくしー、終わったよ」

つくし 「はーい」

つくし、ロッカー室から登場

つくし 「たんぼぼ、倉庫に物しまつてくれた？」

たんぼぼ 「しまった」

つくし 「じゃあ、今日は終了です。お疲れ様」

たんぼぼ 「お疲れ様」

つくし 「汚れちゃったねえ」

たんぼぼ 「うん」

つくし 「車中ぐっすりだったね」

たんぼぼ 「うん」

つくし 「仕事、大変だった？」

たんぼぼ 「大変だった」

つくし 「——そうだよね、農作業は力仕事多いもんね」

たんぼぼ 「——でもね、綺麗だった」

つくし 「ねえ、綺麗？ということ？」

たんぼぼ 「水溜り、キラキラしてた」

つくし 「ああ、田んぼのコトね」

たんぽぽ 「休憩中もね、黄瓜さんとか、農家さんとか、色んな人と話出来て楽しかった」

つくし 「そう、楽しいことたくさん出来てよかったね」

たんぽぽ 「うん」

黄瓜、耐えられなくなつて

黄瓜 「なあたんぽぽ、そのままだと床汚れちゃうから、早く着替えて」

たんぽぽ 「はい」

灰原 「つくしもさ、勤勉の報告早く書きちゃって」

つくし 「あ、すいません」

たんぽぽ 「はい」

たんぽぽ、退場

灰原、黄瓜、桃瀬、退場しようとしながら

桃瀬 「あーあ、疲れた。お疲れ様」

つくし 「お疲れ様」

茶志内 「おつかれー」

桃瀬、退場

黄瓜 「楽しんで仕事出来るって、良いことだよな。お疲れ様ー」

桃瀬 「そうだねー」

つくし 「お疲れ様」

茶志内 「おつかれー」

黄瓜、退場

灰原 「茶さん、さっき話したの、そういうことだから、よろしく頼むね。お疲れ様」

茶志内 「お疲れー」

つくし 「——お疲れ様」

茶志内とつくしとアオキ

つくし 「茶さん、ありがとうございます。たんぽぽ、なんとか楽しんで仕事出来るみたいです。皆さんの理解のおかげです。ありがとうございます」

茶志内 「いやいや、そんなことないよ」

つくし 「今まで自分から仕事の話なんてしたことなかったんです。だからこれ、すごい進歩なんですよ」



茶志内 「あーそう。そりゃあ良かったね」

つくし 「これでたんぽぽもようやく、自立して生活出来るようになるかもしれません」

茶志内 「でも、たんぽぽ君もつくしちゃんがいるから心強いよね。幼馴染なんですよ？

普通そこまで面倒見ないよ、何でそこまでたんぽぽ君の為にできるの」

つくし 「いやいや私は、たんぽぽのお母さんと約束しただけですから」

茶志内 「約束ねえ。でもさ、あそこまで、ずっと一緒にいたら、ストレス溜まんないの」

つくし 「ストレスですか、あまり考えた事なかったです」

たんぽぽ、登場

茶志内 「たんぽぽ君、どうだい、仕事は楽しいかい」

たんぽぽ 「楽しいです」

茶志内 「そつか。仕事は楽しんで出来るのが一番だよ」

固定電話が鳴る

茶志内 「じゃあ、お疲れ様」

たんぽぽ 「お疲れ様です」

茶志内、退場

たんぽぽ 「つくしお腹空いた」

つくし 「そうだ、たんぽぽ、今日余ったおかき買ったんだけど、食べる?」

たんぽぽ 「おかき?」

つくし 「私が作ったの」

たんぽぽ 「食べる!」

つくし、おかきを出して

つくし 「ジャジャジャジャーン」

たんぽぽ 「いいにいいい」

たんぽぽ、おかきを勢いよく食べ過ぎて蒸せる

たんぽぽ 「げげげ」

つくし 「あーあ、勢いよく食べ過ぎなんだよ、ちょっと飲み物」

たんぽぽ 「げげげ」

つくし 「ちょっと大丈夫?」

たんぽぽ 「つくしのおかき、美味しい」

つくし 「ありがとう」

たんぽぽ 「んまんま」

つくし 「私もようやく、この仕事任せてもらえるようになったんだ。私にも出来たんだから、きっとたんぽぽも出来るようになるよ」

たんぽぽ 「うん。すぐに出来るようになる」

つくし 「ひどー、結構苦労したんだよ」

たんぽぽ 「ん——、でも仕事するなら、つくしと一緒にいい」

つくし 「——気持ち悪い事言わないで。わたしもずっと傍にいてあげられる訳じゃないし、一人で色々出来るようになるんでしょ」

たんぽぽ 「うん」

つくし 「急ぐことはないし、一歩々々、しっかりやってこ」

たんぽぽ 「ウン」

つくし 「じゃあ、帰ろうか」

つくし、たんぼぼ、退場

アオキン、二人の様子を見つめる

アオキン「——」

茶志内、アオキンを見て

茶志内「どうした」

アオキン「いや、羨ましいなと思ひまして」

茶志内「つくしちゃんの事？」

アオキン「はい」

茶志内「たんぼぼ君も大変なのは、これからでしょ、ずっとつくしちゃんが傍にいてくれる訳じゃないんだから。アオキンも後輩出来たんだから、もっと色んなこと出来るようにならないと」

アオキン「——はい」

茶志内「じゃあ、帰る準備して」

アオキン「はい」

茶志内、アオキン、ロッカー室へ退場

## ○幼少期の二人（春）

カーテンに日光が反射して、窓越しの風景が影絵のようにシルエットで見える

つくし、蹲って泣いている

1995年 春 朝 晴れ

たんぽぽ、登場

たんぽぽ 「つくし何かあったの、どうして泣いているの」

つくし 「転んで擦りむいた。痛いのおいおいおい」

たんぽぽ 「泣かないで」

つくし 「むり」

たんぽぽ、悩んで、思いつく

たんぽぽ 「見てて。変—身」

たんぽぽ、影絵でイヌになる

たんぽぽ 「犬になっちゃったよお」

つくし 「おいおいおいおい」

たんぽぽ 「つくし、ワンワン泣かないで」

つくし 「むり」

たんぽぽ 「あ」

たんぽぽ、不思議な音のオナウをする

つくし 「え？今のおなら？」

たんぽぽ 「うん。たくさん出た」

つくし 「たくさん出たって。響きすぎだよお、あははは……！」

たんぽぽ 「元氣出た？」

つくし 「ああ、うん。元氣出たよお。ありがとう」

たんぽぽ 「じゃあ向こうでかくれんぼの続きしよー」

二人、手を握る

つくし 「うん」

たんぽぽ 「行こう。ダッシュー」

つくし 「ちよっと早いよおー」

たんぽぽ、つくし、退場

## ○夏の朝 前編

◎照明変化 株式会社アポロ一室 朝

2015年 夏 朝 晴れのち曇り

茶志内、灰原、黄瓜、桃瀬、アオキンがいる

アオキン、カーテン、ベランダを開ける

一同、言い知れぬ厚さの中、苛立っている。

黄瓜

「だからさ、もう、我慢できねえって言ってんだよ」

桃瀬

「ちょっと落ち着いて」

黄瓜

「だってそつだろ」

桃瀬

「まあ、そつだけど」

灰原

「あいつがいると足でまといなんですって」

茶志内

「はあ」

灰原

「茶さんも一緒に現場になったらわかります。言われたことも出来ない様じゃ終わってますよ」

黄瓜

「もう限界なんだよ、ここ数カ月で多分わかっただろ」

アオキン「――」

灰原 「茶さん、そういう事だから」

茶志内 「わかったよ」

つくし、たんぽぽ、登場

つくし 「たんぽぽ、倉庫の中、整理してて」

たんぽぽ「うん」

たんぽぽ、退場

茶志内 「――ねえ、つくしちゃん、ちょっといい」

つくし 「なんですか」

茶志内 「たんぽぽ君のことさ、私も期待していたんだけどね、どうも問題が多くて」

つくし 「はい」

茶志内 「まず根気がない、それから協調性もない。ちょっと注意すると、すぐ一人でどこに行ってしまうみたいなんだ。でも一緒に働いてる人達は仕事やり方教えてただけみたいで」

つくし 「みなさん、そう思っているんですか」



一同、押し黙る

たんぽぽ 「――」

つくし 「たしかに、たんぽぽには今仰ったような欠点はあるかもしれませんが」

たんぽぽ 「――」

茶志内 「じゃあさ」

つくし 「たんぽぽは、よく失敗するし、計算だって間違えたりもします。でもその程度の欠点は、人間誰しもが、持っているんじゃないでしょうか」

たんぽぽ、登場

灰原 「つくし、あいつ使えないよ」

つくし 「そんなこと言わないでください」

灰原 「指示通りやってくれないと、とばっちり食うのはこっちなんだよ」

黄瓜 「こっちが親切に教えてやってるのに反抗するんだぞ、な」

桃瀬 「あ、うん」

黄瓜 「なあ、あいつってさ、バカなの」

つくし 「――たしかに、たんぽぽは、ばか、かもしれません」

たんぼぼ「――」

たんぼぼ、退場

つくし「でも、一生懸命働きますから。だから、お願いです。たんぼぼには、皆さんの支えが必要なんです。そのくらいのことでも切り捨てないで下さい。お願いします」

茶志内「でもなあ、比べちゃうんだなあ、ほかのスタッフが」

会社の固定電話が鳴る

茶志内「あ、ちょっとすいません」

茶志内、退場

つくし「――」

桃瀬、コピーを渡して

黄瓜「だったら、つくしちゃん、たんぼぼをどうやって扱えばいいのか教えてくれよ」

つくし「それはわたしだって明確には言えませんよ、たんぼぼと現場で直接接しているのは皆さんなんですから」

黄瓜「まあ、そりゃそうなんだけども。使いずらくて仕方ねえって話なんだよ」

つくし「そんなこと言わないで下さい」

灰原 「全く優秀な後輩が入ってきましたよ、ホント」

アオキン 「——」

つくし 「たんぽぽがどんな人なのか、何を考えているのか、付き合ってみなきゃわからない事たくさんあると思います。大変だと思いますが徐々に探って行きましょ」

灰原 「そりゃ言っつのは簡単だけどさ」

つくし 「私もできる限り協力しますから。よろしく願います」

黄瓜 「つくしちゃんが面倒見てくれよ、つくしちゃんが連れて来たんだからさ」

灰原 「そうそう、その方が能率いいよ」

つくし 「たんぽぽはきっと仕事覚えます。時間はかかるけど仕事は一生懸命やりますから」

灰原 「こちらら時間と勝負して仕事やってんの。チンタラやられたら迷惑に決まってるだろ」

つくし 「——」

桃瀬 「あんまり言いたくないんですけど、たんぽぽさんもそうですけど、つくしさんも最近自分の仕事お座成りになってますし」

つくし 「それはー」

灰原 「おいおい、他人のこと言う前に自分のことしっかりやれよ」

つくし 「——はい」

黄瓜 「茶さん、考えたほうがいいよ、これ」

茶志内 「ん、ああ。いつものハイエースね」

桃瀬、退場

桃瀬 「じゃあ行つて来まーす」

茶志内 「はい」

黄瓜、退場

黄瓜 「別のところ探した方がいいんじゃないの、アイツ、ここ合わないよ」

つくし 「——」

灰原、退場

灰原 「所詮無理なんだよ。茶さん、もうすぐ繁忙期で、使えない奴いたら足でまとい  
なんだよ。だから頼むよ」

茶志内 「——わかってるよ」

つくし、席に座り、コーヒーを飲む  
アオキンが掃除をしている

つくし 「――」

たんぽぽ、登場

たんぽぽ 「――」

つくし 「たんぽぽ」

たんぽぽ 「――」

つくし 「たんぽぽー」

たんぽぽ 「終わった」

たんぽぽ 「――」

つくし 「おい」

たんぽぽ 「――」

つくし 「ねえ、たんぽぽ、お腹空いてるっ」

たんぽぽ、無視する

つくし 「お菓子あるよー」

つくし、ポケットからお菓子を出す

つくし 「はい、おかき。食べるっ」

たんぽぽ 「——」

たんぽぽ、お菓子を食べる

つくし 「美味しい？」

たんぽぽ、ゆっくり頷く

たんぽぽ 「——」

つくし、お菓子を食べる

つくし 「うん、美味しいねえ」

たんぽぽ 「——」

二人のポリポリとおかきを食べる音が聞こえる。

## ○夏の風景描写 前編

ペランダのたんぽぽに焦点が絞られていく。  
一輪の花咲きたんぽぽが、風に揺れている。

## ○夏の夜 前編

2015年 夏 曇り

茶志内、灰原、黄瓜、桃瀬、赤谷がいる

黄瓜、オカッキーのコスチュームで座っている。

「オカッキーのテーマ」が流れている。

赤谷、カーテンを開ける

赤谷

「オカッキー？」

茶志内

「そう、オカッキー」

赤谷

「オカッキーって、あのせんべいみたいなお菓子ですよ、ウケないっすか、てか、うけなくなないっすか？てかうけなくなないっすか」

黄瓜

「お前、ちゃっかり馴染み過ぎなんだよ、ばかやろー」

赤谷

「新人で入りました、赤谷です、よろしくどうぞー」

茶志内

「みんな、優しく教えてあげてね」

桃瀬

「で、何なのそれ」

茶志内

「ああそれ、うちで新しく受け持つことになった案件。風が丘のPRも兼ねてね。それが企画書」



桃瀬、企画書を読む

赤谷

「風が丘公式キャラクター、オカッキー。おかきの力で町を元気に。米に込めた思いは不可能を可能にする。何これ、超ダサくてウケるんですけど。オカッキーくんには、オカッキーママとオカッキーパパ、そして妹の、いもつきーちゃんがいいます。お友達のせんべいくんとお米ダンスをして遊びます。いもつきーってなんだよ、一人だけ芋になってんじゃねっすか」

桃瀬

「どう、着心地は」

黄瓜

「思ったより重い」

赤谷

「オカッキーくん」

オカッキー、手を振る

桃瀬

「てかさ、なんでおかきなの」

茶志内

「ここら米農家多いだろ、町の名物のPRだって。町興しの一環だよ」

赤谷

「米だから、おかきってなんか安易っすねえ」

桃瀬

「誰担当するの、この仕事」

茶志内

「そうだなあ、そんなに難しい仕事じゃないからなあ、夏場は地獄らしいけど」

黄瓜 「俺パス、バリバリ今夏場じゃんか、しかも中、変な匂いがする。おえー」

桃瀬 「うっそー私パス」

灰原 「あ、俺も」

赤谷 「自分も」

茶志内 「待てよ、じゃあ誰やんだよ」

灰原 「あの二人にやらせりゃいいじゃん」

桃瀬 「いいかも」

黄瓜 「そだな」

たんぼぼ、つくし、登場

たんぼぼ 「お疲れ様でした」

赤谷 「ちわわーっす、新人の赤谷です。よろしくござー」

つくし 「赤谷さん、よろしく」

赤谷 「お、この方が噂のたんぼぼさんっすね」

つくし 「よろしくお願いしますって言って」

たんぽぽ 「よろしくお願いします」

赤谷 「つくしさん、カバン持ちますよ」

つくし 「あ、ありがとう」

赤谷 「あっち置いておけばいいですか」

つくし 「ありがとー!!」

灰原 「あいつ面倒臭い奴だけど、仕事は出来るんだよ」

つくし 「そうなんですか」

灰原 「誰かさんとは大違い」

つくし 「それは、どういう意味ですか」

黄瓜 「つくしちゃん、アイツ急に距離詰めて来るから気を付けてね」

つくし 「あ、はい。てか、何ですかこれ、新しい仕事ですか」

茶志内 「そう」

つくし 「かわいいですねー、目とか、手とか、足とか、この鉢巻とか、すっごく可愛い」

黄瓜 「なんかわかんないけど、嬉しいわ」

桃瀬 「別にアンタの事、褒めてる訳じゃないからね」

黄瓜 「あ、そっか」

茶志内 「ねえ、つくしちゃんにたんぽぽ君、いい」

つくし 「はい」

茶志内 「このオカッキーの仕事、君たちをお願いすることにしたから」

つくし 「本当ですか」

茶志内 「まずは、企画書読んで概要理解して」

つくし 「わかりました、ありがとうございます」

たんぽぽ 「？」

つくし 「たんぽぽ、チャンスだよ、これで名誉挽回しよ」

たんぽぽ 「名誉挽回」

つくし 「そう、仕事出来るってみんなに思わせよ」

たんぽぽ 「——」

つくし 「たんぽぽ、ねっ」

たんぽぽ、つくしの手を振り払って、ロッカーの方向へ退場

灰原 「また始まった」

つくし 「そういえば聞いて下さい。前の勤務の時に、たんぽぽ一人で包装紙切れるようになったんですよ」

赤谷 「へえ、それで」

つくし 「え」

赤谷 「それだけっすか」

つくし 「ええ、まあ」

灰原 「それ、みんなの前で言うほどの事か」

黄瓜 「包装紙切るって、お菓子屋の仕事だろ、そんなにすごい事なのか」

赤谷 「俺、初日でパスしました」

つくし 「――」

黄瓜 「なんだ、誰にも出来る事なんじゃん」

つくし 「たんぽぽ、日々少しずつではありますけど、前進してますから」

灰原 「前進ねえ」

黄瓜

「だからそれさ、つくしの前だからじゃねえの。なんかさ、俺らは俺らなりにたんぽぽにストレスたまってたんだよ。まあ、こんな格好で言う事じゃねえかもしれねえけど」

灰原

「つくしもわかってんだろ」

つくし

「——」

桃瀬

「そついえば、つくしさん、業務報告、記入し忘れてましたよね」

つくし

「あ、ごめーん」

桃瀬

「あ、私やっておきました。多分たんぽぽの事で忙しいんじゃないかって思ったんで」

つくし

「ありがとうー」

灰原

「おいおい、またかよ」

つくし

「すいません」

黄瓜

「なあ、これ邪魔だから倉庫の脇にでも置いておこつ、灰原、モモちゃん、赤谷、脱がすの手伝って」

赤谷

「ういーっす」

つくし、勤怠の報告を書きこめる。

黄瓜、灰原、桃瀬、赤谷、ロッカーに退場

たんぽぽ、登場

つくし 「たんぽぽ」

たんぽぽ 「――」

つくし 「ね、たんぽぽ、頑張ろうね」

たんぽぽ 「――」

つくし 「返事」

たんぽぽ 「――う」

つくし 「何それ、中途半端な返事してー」

たんぽぽ 「――」

つくし 「えっと、オカッキーショーではオカッキーがオカッキー体操を踊ります。ガ

イドの方は同付したDVDを参考に、体操とナレーションを覚えてください」

つくし、DVDを入れて、テレビ画面を見る

オカッキーのテーマが流れる

つくし 「アナウンスする人も結構セリフ覚えなきゃだね、とりあえずやってみよう」

たんぽぽ「――」

つくし「ねえ、たんぽぽ」

たんぽぽ「――」

つくし、リモコンでDVDを切る

「オカッキーのテーマ」が止む

つくし「たんぽぽ、やりたくない仕事でもやらないと」

たんぽぽ「やだ」

つくし「たんぽぽ、そんなこと言わないで」

たんぽぽ「――」

たんぽぽ、オカッキーのグッズの入った段ボールを壊す

つくし「たんぽぽ、やめて」

たんぽぽ「やりたくない」

つくし「やめてって」

たんぽぽ「――やりたくない」



つくし、必死に抑えようとするが止まらな

つくし

「いい加減にしろよー！迷惑かけて当たり前なんて思つなよー！今、出来ない事があるなら、出来るように努力をしようって言ってるじゃん。陰口叩かれて辛いかもしれないけどさ、言いたい奴には好き放題言わせておけいいんだよ。一人で色んな事出来るようになったいんですよ。だったら何度も同じこと言わせないでって。そんなんだから、ばかって言われるんだよ」

たんぽぽ「――」

つくし「――あ、ごめん、たんぽぽ、私、なんていうか」

アオキン、登場

たんぽぽ「――」

たんぽぽ、退場

つくし「ちょっとごめん。待って、たんぽぽ」

つくし、退場

アオキン、二人の様子を見ている

茶志内「うわー！オカッキーグズがー！何してるんだ、お前」

アオキン「いや、僕じゃありません」

茶志内 「いいから、拾えー!」

二人 オカッキーグッズを拾いながら

茶志内 「てか、お前今帰って来たのか」

アオキン 「はい」

茶志内 「他の奴は定時で帰って来たぞ。時間かかり過ぎなんだよ」

アオキン 「———すみません」

茶志内 「もっと早く終わらせないと」

アオキン 「すみません、次は気をつけます」

## ○幼少期の二人（夏）

カーテンに日光が反射して、窓越しの風景が影絵のようにシルエットで見える

つくし、たんぽぽがいる

1995年 夏 朝 晴れ

つくし 「——んしよ、んしよ、あつー」

つくし、汗をぬぐいながら

たんぽぽ、つくしのそばに来て

つくし 「このたんぽぽね、踏まれてクシャクシャになってたの。だから支え作ってあげようと思って」

たんぽぽ 「つくしは優しいね」

つくし 「優しくないよ、困ってたら助けてあげるのは普通の事だよ」

たんぽぽ 「そっかあ。普通の事か。じゃあ、たんぽぽもつくしが困った事あったら助けてあげる」

つくし 「ありがとー、人も花も一緒だね」

たんぽぽ 「うん。だからさあ、だからさ、ずっと仲良しでいようね」

つくし 「うん、ずっと仲良しね、約束」

たんぽぽ 「約束」

つくし 「あ——たんぽぽ、鼻出てるよ」

たんぽぽ 「あー本当だ」

つくし 「はい、チーン」

つくし、たんぽぽの鼻にティッシュを当てて

たんぽぽ 「ちーん」

つくし 「うわ、汚ねえ!! エンガチョー、エンガチョー」

たんぽぽ 「ちーん」

つくし 「やめろって!! エンガチョー!! エンガチョー!!」

たんぽぽ、つくし、退場

## ○夏の朝 後編

2015年 夏 朝 雨

快晴だった天候が徐々に悪天候になっていく。

アオキン、赤谷、黄瓜、灰原がいる

赤谷、カーテンを開ける

アオキン、部屋の掃除を行っている。

灰原、ソファで横になっている。

黄瓜 「お前さ、前に体調悪いって言ってたの、嘘だろ」

赤谷 「え、なんでっすか」

黄瓜 「海行って来たとか、書いてたろ」

赤谷 「それ黙って置いて下さいね」

黄瓜 「あとで消しとけよ」

赤谷 「ういーっす」

アオキン 「――」

つへい、たんぽぽ、登場

たんぽぽ、つへいと距離を置いて登場

つくし、資材の入った重いダンボールを運んでいる。

つくし 「んしょ、んしょ」

黄瓜 「つくしちゃん、そんなに持って大丈夫？」

つくし 「大丈夫大丈夫」

黄瓜 「いいよ、俺持って行くから」

つくし 「ありがとうー」

黄瓜 「たんぽぽ、お前もさ、こついう時に、持ってやれよ」

たんぽぽ 「——」

たんぽぽ、退場

黄瓜 「おい、聞いてんのか」

つくし 「いいんです。ありがとうございます」

黄瓜、退場

アオキン 「たんぽぽ、何かあったんですか」

つくし 「わかるっ」

アオキン 「なんか、様子おかしいですよね」

つくし 「私がいけないの。実は最近、一度、たんぽぽに当たっちゃって。私、仕事のストレス、たんぽぽにぶつけちゃったの。それからなんか、たんぽぽ、様子がおかしくて」

アオキン 「——」

つくし 「仕事も真面目にやってくれないし、もう、どうすればいいのかな」

アオキン 「——」

灰原 「辞めさせるよ」

つくし 「——」

黄瓜 「俺もそう思うよ。これ以上は無理だって」

つくし 「でも」

灰原 「もう皆、限界なんだよ」

アオキン 「——」

たんぽぽ、登場

たんぽぽ 「——」

灰原、溜息を吐き退場する

つくし 「――」

つくし、溜息

茶志内、登場

茶志内 「どうしたの」

つくし 「いやー」

茶志内 「そっいえばオカッキー、順調？」

つくし 「あ、はい」

茶志内 「その様子じゃ、なんかありそうね」

つくし 「オカッキーの紹介が長くて苦戦してます」

茶志内 「ああ、そう。町もPRで必死だからね。米の力は不可能を可能にするなんてよく言ったもんだよ。ちなみに、たんぼぼ君はどうなの」

つくし 「動かないでじっとしてて」

茶志内 「まあ、最悪それでもいいよ」

つくし 「わかりました」



茶志内 「まあ、たいした仕事じゃないし、ある程度テキトーでもいいから」

つくし 「——テキトーって」

会社の固定電話が鳴る

茶志内、電話に向かう

茶志内 「はいはい、お待ちくださいませー」

茶志内、退場

たんぽぽ、登場。作業に使った資材を運びつとっている

つくし 「たんぽぽ」

たんぽぽ 「——」

つくし 「ちょっと」

つくし、たんぽぽを席に座らせる

つくし 「——あのね、たんぽぽ」

たんぽぽ 「——」

つくし 「わたし、あのとき、あんなこと言っちゃったけど、あれは全部私が悪いの。たんぽぽは悪くないの」

たんぽぽ「――」

つくし「我慢出来なくて怒っちゃって、ごめん」

たんぽぽ「お腹空いた？」

つくし「あ、うん」

たんぽぽ「――おかき食べる？」

つくし「え」

たんぽぽ「おかき食べる？」

つくし「あ、うん」

たんぽぽ、おかきを渡す

つくし、おかきを食べる

たんぽぽ「美味しい？」

つくし「美味しい」

たんぽぽ「オカッキーの体の殆どはオカキで出来ています・・・えっと」

つくし「オカッキー君には、オカッキーママとオカッキーパパ、そして妹の、いもつき

ーちゃんがいます。お友達のせんべいくんとお米ダンスをして遊びます」

たんぽぽ「あっ」

たんぽぽ、不思議な音のオナラをする

つくし「何、今のオナラっ響き過ぎでしょ、あはははは……」

たんぽぽ「元気出た？」

つくし「え、あ、うん——元気出たよお」

たんぽぽ、笑って

たんぽぽ「じゃあ、たんぽぽも嬉しい」

つくし「——ありがとう」

## ○夏の風景描写 後編

たんぽぽにスポットが当たる

雨の中、一輪のたんぽぽが、風に揺れている

## ○夏の夜 後編

2015年 夏 夜 雨

株式会社アポロ一室 夜

雨の音の中に雷の音や、風で窓が揺れる音が混ざる

灰原、黄瓜、桃瀬、アオキンがいる

会社の固定電話が鳴る

灰原 「――」

たんぽぽ、登場

灰原 「はい、こちら株式会社アポロでございます」

たんぽぽ 「つくつくつくしー?」

つくし、登場

つくし 「はいはい、うわあ、たんぽぽびっしよりだねえ」

たんぽぽ 「濡れた」

黄瓜 「早く着替えれよ」

つくし 「すいません。たんぽぽ、あっち」

たんぽぽ「うん」

灰原、登場

灰原「なあ、つくし、今日お菓子屋勤務だったよな」

つくし「あ、はい。たんぽぽと二人で」

灰原「なんかさ、今電話あってオープン壊れちゃったみたいなんだけど、変なところ触ってないよな」

つくし「うそ、触ってないと思いますけど」

たんぽぽ、登場

つくし「たんぽぽ、オープン触ってないよね」

たんぽぽ「——」

一同「——」

つくし「私、ちょっと行って来ます」

黄瓜「送って行くのか」

つくし「いや、大丈夫です。ありがとうございます」

黄瓜「あ、そう」

つくし 「たんぼぼ、いい。皆に迷惑をかけないようにね。私、忘れ物しちゃって、ちょっと取りに行つて来るから、ちょっと待ってて。あとは一人で出来るよね」

たんぼぼ 「うん」

つくし 「じゃあ、みんなの言う事聞いて、待っててね、約束」

たんぼぼ 「約束」

つくし 「じゃあ、すみません。ちょっと行つて来ます」

つくし、退場

一同 「――」

たんぼぼ 「――」

桃瀬、溜息

たんぼぼ、車の雑誌を見ている。

黄瓜 「お前のせいだぞ」

たんぼぼ 「――」

黄瓜 「何もすることないなら、倉庫の中でも、掃除しとけ」

たんぼぼ 「はい」

たんぼぼ、退場

赤谷、登場

赤谷 「ちわわーす」

全員 「――」

赤谷 「――うわ、なんすかこの重たい空気」

桃瀬 「みんな疲れてんの」

赤谷 「お疲れっした」

桃瀬 「アンタは元気ね」

赤谷 「今日当たりだったみたいで、一人暮らしの人ですぐ終わったんす。そっいえば、  
もしも良かったらどうぞって、スイカ買ったんすよ、食べません」

桃瀬 「あ、本当」

黄瓜 「お前切ってくれよ」

桃瀬 「えーいやだ、赤ちゃんお願い」

赤谷 「はい、やらせていただきますーす」



赤谷、退場

たんぽぽ、登場

桃瀬 「あ、あとコーヒーも入れて」

赤谷 「えーまじっすか」

桃瀬 「もっ沸かしてあるから」

赤谷 「桃瀬さんお願いしますよ」

桃瀬 「じゃあー」

桃瀬、辛そうに立つ

灰原 「おい、たんぽぽ、コーヒー入れろ。いつもモモちゃんにやらせんなよ」

たんぽぽ 「はい」

灰原 「俺、砂糖3つにミルク1つ。モモちゃんは」

桃瀬 「砂糖1つにミルク1つ」

黄瓜 「じゃあ俺は砂糖2つに、ミルク1つ。赤谷はどうする？」

たんぽぽ 「――」

赤谷 「俺は砂糖とミルク2つずつでー」

黄瓜 「わかってんのかよ」

灰原 「一度言ったら全部覚えるよ、ばか」

たんぼぼ 「――」

黄瓜 「てかよ、雨すげえな」

赤谷 「お待たせしましたー」

一同 「おおお」

茶志内、登場

茶志内 「――いやあ最悪だよお」

赤谷 「お疲れっす、これ農家さんから貰ったスイカっす」

茶志内 「ああ、ありがとう」

桃瀬 「茶さん、コーヒーは」

茶志内 「ああ、ブラックで」

赤谷 「ブラックっすか」

茶志内 「やっぱ大人はブラックでしょ」

赤谷 「ブラック飲んだらお腹」ロ」ロするんすよねえ」

雷鳴の音がし、その少しあとで、倉庫から物音がする

黄瓜 「あのばか」

たんぼぼ 「あああああああ」

黄瓜 「止めろ……！」

たんぼぼ、登場

たんぼぼ 「つくし——……つくし——……！」

一同、暴れるたんぼぼを取り押さえるが、振り払われる

茶志内 「おい、こういう時どこうすればいいんだよ」

アオキン 「どこうって」

茶志内 「どつすりゃいいんだよ、これ」

アオキン 「——たんぼぼ」

アオキン、近づくと振り払われる

アオキン 「——」

たんぽぽ「うっ！……うっ！……行ったの？？」

し何処「……」

暗転

## 〇つくしの死

暗転中の会話 過去の回想

つくし 「このたんぽぽね、踏まれてクシャクシャになってたの。だから支え作ってあげようと思って」

たんぽぽ 「つくしは優しいね」

つくし 「優しくないよ、困ったら助けてあげるのは普通の事だよ」

たんぽぽ 「そつかあ。普通の事か。じゃあ、たんぽぽもつくしが困った事あったら助けてあげる」

つくし 「ありがとー、人も花も一緒だね」

たんぽぽ 「うん。だからさあ、だからさ、ずっと仲良しでいようね」

雨の音と雷鳴が徐々に大きくなり、二人の声をかき消していく

つくし 「うん、ずっと仲良しね、約束」

たんぽぽ 「約束ね。ずっと仲良し」

圧倒的な雷鳴が鳴り響く

## ○秋の朝 前編

株式会社アボロ一室 朝

2015年 秋 朝 晴れ

たんぽぽのつぼみが照らされる。

アオキン、茶志内、（ベランダの外に灰原が荷物の運搬で行き来している）「がいる

茶志内 「お前から見て、どう思うの、たんぽぽって」

アオキン 「——どうって」

茶志内 「いや、あいつ大丈夫かって」

アオキン 「——」

茶志内 「あいつを活かすことが出来る職場ってあるのかな」

アオキン 「——」

茶志内 「心配してやってんだよ、俺は」

アオキン 「——はあ」

茶志内 「あいつ、最近全然仕事にならないだろ。もし良い所がなかったとするとさ、根  
気と協調性って結構大事だと思うんだよ。それがないと、なあ」

アオキン「――」

茶志内 「職場で必要とされなきゃ辛いのは本人自身なんだよ。綺麗ごといくら並び立てたって信頼を得られないと一番傷つくのは、たんぽぽ自身だろ」

#### 灰原、登場

灰原 「その通りですよ。俺たちは金貰って働いてるんです。それぞれがそれぞれの任された役割を全うしてこそ、初めて仕事なんですよ。すぐに投げ出す奴は論外、信頼の欠片もない」

アオキン 「でも、たんぽぽは今つくしさんの事で」

灰原 「最近のアイツ、元々出来る事も少ないくせに、何もやろうとしないじゃないですか」

茶志内 「それは、まあ、確かに」

アオキン 「――」

灰原 「そもそも、たんぽぽがミスしなきゃ、つくしがあんな事にはならなかったのに」

茶志内 「いや、それは言い過ぎでしょ。あれは事故だったんだから」

会社の固定電話が鳴る

茶志内 「はい、ただいまー」

桃瀬、赤谷、登場

アオキン 「——でも」

桃瀬 「おはよー」

赤谷 「おざまーす。なんすか、面白い話っすか」

灰原 「なんでもねえよ、仕事の話」

赤谷 「なんだ」

灰原 「てか、モモちゃん、赤谷、昨日帰る時、農家さん怒ってたぞ」

桃瀬 「え、なんで」

黄瓜 「仕事サボって携帯ばかり見てるって」

桃瀬 「えーうっそ」

赤谷 「まじっすか、見られてましたか。あそこ、休憩時間短くって、キツィんすよ、全部手作業だし。時代遅れなんすよねえ、ホント」

灰原 「お前らちゃんとせえよ」

赤谷 「でも、言われたことは、きっちりやってますよ」



灰原 「いや、そういう事じゃなくてさ、お前らは、たんぼぼと違って、やれば出来るんだからさ、態度に」

黄瓜、登場

黄瓜 「おはよう。どうした」

灰原 「仕事の話だよ」

黄瓜 「ああ、そういえば、たんぼぼ、今後どうしてくんたろうな」

灰原 「辞めるしかないんじゃない、さっき茶さんも気にしてたよ」

黄瓜 「で、たんぼぼは」

灰原 「遅刻じゃねえの」

たんぼぼ、ペラペラの荷物の後ろから立ち上がって

たんぼぼ 「おはようございますー!」

黄瓜 「何してんだよ」

たんぼぼ 「今日はオカッキーの仕事だから、用意してました」

黄瓜 「——気が早いよ」

たんぼぼ 「——ねえ、つくしはごいっ。」

間

黄瓜 「なに夢みたいなこと言ってんだよ」

灰原 「――」

灰原、退場

桃瀬 「私も着替えに行こー」

灰原、桃瀬、退場

赤谷 「たんぽぽさん、なんつうか、つくしさんは亡くなったんすよ」

たんぽぽ 「どついう事？」

赤谷 「わかんないんすか」

たんぽぽ 「――もう少し待ってたら来るかな」

たんぽぽ、車の雑誌を見ている

茶志内、登場

茶志内 「なんだ、黄瓜、たんぽぽ、来てたのか」

たんぽぽ 「はい」

黄瓜 「あいつどつうするんですか」

茶志内、コーヒーを飲んで

茶志内 「いやあ」

たんぼぼ 「——」

アオキン 「——何見てるの」

たんぼぼ 「車の教科書」

アオキン 「そんな雑誌見て面白い」

たんぼぼ 「この車乗りたい、黒のジープ」

アオキン 「それよりも、まず免許取らないと」

黄瓜、掲示板を確認しようとして

黄瓜 「アオキン、邪魔」

アオキン 「あ、すいません。なあたんぼぼ、なんで車乗りたいの」

たんぼぼ、コップを見て

たんぼぼ 「違う」

黄瓜 「——は」

たんぽぽ 「違う」

黄瓜 「何が違うんだよ」

たんぽぽ 「そのコップ」

黄瓜 「別になんだっていいだろ」

たんぽぽ 「——だめ」

黄瓜 「だめも糞もあるか、入れたのは俺だぞ」

たんぽぽ 「だめ」

たんぽぽ、コップを奪い取る

黄瓜 「——なにすんだよ、おい」

アオキン、茶志内、黄瓜を止めながら

茶志内 「ちよっとどうしたの」

黄瓜 「どうもこうもねえよこいつが勝手に」

アオキン 「つくしさんのだからじゃないですか」

黄瓜、落ち着いて

黄瓜 「——あつそ。バカじゃねえの」

黄瓜、退場

アオキン、たんぽぽに寄り添うように近づいて

アオキン 「——たんぽぽ」

たんぽぽ 「つくしはなんで帰って来ないの」

アオキン 「突然の事で整理つかないのかもしれないけど、徐々に前に進まなきゃね」

たんぽぽ 「たんぽぽがバカだから？たんぽぽがバカだから、つくしは戻って来れないの」

アオキン 「たんぽぽのせいじゃないよ」

たんぽぽ 「たんぽぽが仕事ちゃんと出来なかったから、つくしどっかに行ったんでしょ」

アオキン 「それは」

たんぽぽ 「——つくし、どこに行ったの？」

## ○秋の風景描写 前編

ペランタのたんぽぽが綿毛に代わっている。

落ち葉がペランタのアチアチにちらちらに落ちていく。そわらは囀に打たれて溜っている。

## ○秋の夜 前編

2015年 秋 夜 雨

株式会社アボロ一室 夜

灰原、窓、カーテンを閉める

灰原、テレビを見ている

灰原 「あはははっはは」

たんぽぽ、登場

たんぽぽ 「ねえ」

灰原 「――」

たんぽぽ 「ねえ」

灰原 「――」

たんぽぽ 「ねえってば」

灰原 「なんだよ」

たんぽぽ 「つくしはどこに行ったの」

灰原 「どこって、葬式行ったら」

たんぽぽ 「なんでつくし、あそこで寝てたの」

灰原 「何、バカな事言ってるだよ」

たんぽぽ 「なんで、あの時、みんな悲しい顔してたの」

灰原 「――」

たんぽぽ 「つくしはどこに行っちゃったの、いつ帰って来るの」

灰原 「――」

たんぽぽ 「たんぽぽが何かすれば戻って来るかな」

灰原 「知るか。ただ仕事は一生懸命やった方がいいよ、特に君は」

たんぽぽ 「――」

灰原、退場

たんぽぽ、席に座って、「コップを見つめる

茶志内、アオキン、登場

茶志内 「アオキン、お前、昨日も定時で終わらなかったんだって」

アオキン 「はい」

茶志内 「これで何回目だ」



アオキン「すいません」

茶志内「一度言ったら直せよ」

アオキン「はい」

茶志内「どうやったら能率良く出来るか、自分で考えないと」

アオキン「わかりました」

茶志内「わかりましたって、全然わかってないだろ。だから何度も繰り返しになるんだぞ」

アオキン「はい」

茶志内「なあ、お前には、こうなりたい、こうしたいっていう向上心みたいなもんはないのか」

アオキン「——」

たんぼぼ、ペランダを見て

茶志内「どうなんだ」

たんぼぼ「あの、お菓子作りたいです」

茶志内「何言ってるの」

たんぽぽ 「お菓子作りたいんです」

桃瀬、登場

桃瀬 「お疲れっすーどうしたの」

茶志内 「いや、突然お菓子作りたいって言い出して」

桃瀬 「なんで」

茶志内 「さあ」

桃瀬 「あっそう」

たんぽぽ、桃瀬を引きとめて

たんぽぽ 「モモちゃん、つくしみたいに作れるようになりたい。出来ないって言われたくない。出来るようになりたい。だからモモちゃん、お願い」

間

桃瀬 「私、作り方とか、詳しい事わかんないから」

桃瀬、退場

茶志内 「どうしたんだよ、たんぽぽ」

桃瀬、登場

桃瀬、つくしのファイル差し出して

桃瀬 「これ、つくしが前に使ってたレシピ本。わたしも、これ見て覚えたから」

たんぽぽ 「――」

桃瀬 「人に頼る前に、まず自分で何とかしなよ」

たんぽぽ 「ありがとう。お疲れ様でした」

たんぽぽ、退場

茶志内 「いきなりどうしたんだろうね」

桃瀬 「さあ。出来ないって言われたくないって言ってたね。アイツ、ああいう所あるんだね」

茶志内 「何かあったのかな」

桃瀬 「さあ」

アオキン 「――」

## ○幼少期の二人（秋）

カーテンに日光が反射して、窓越しの風景が影絵みたいなシルエットで見える

1995年 夏 朝 晴れ

つくし、縄跳びを飛んでいる

つくし 「1, 2, 3, 4, 5, 6」

たんぽぽ、登場

たんぽぽ 「つくし、何やってんの」

つくし 「縄跳び飛べなくて、練習してた。20回飛ぶって約束したのに」

たんぽぽ 「貸して」

つくし 「うん」

つくし、たんぽぽに縄跳びを渡す

たんぽぽ、縄跳びを飛んで

たんぽぽ 「1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15,

16, 17, 18, 19, 20」

つくし 「たんぽぽ、すごい、私も」

たんぽぽ、つくしに縄跳びを渡して

つくし、縄跳びを飛んで

つくし 「1, 2, 3, 4, 5, 6」

つくし、縄跳びを投げ捨てて

つくし 「だめだあ、出来ない」

たんぽぽ 「もう一回」

つくし 「えー」

たんぽぽ 「次は出来るかも」

つくし 「えー」

たんぽぽ 「たんぽぽにも出来たんだから、つくしにも出来るよ。ほら、もう一回」

つくし 「うん」

つくし、縄跳びを20回飛ぶ

つくし 「うわああー!! 飛べた飛べた」

たんぽぽ 「やったー!!!」

## ○秋の朝 後編

株式会社アボロ室内 朝 晴れ

灰原、黄瓜、桃瀬、赤谷、アオキンがいる

黄瓜 「で、出来るようになったの」

桃瀬 「それが、全然」

灰原 「あいつにここでの仕事は無理なんだよ」

桃瀬 「ちょっと言い過ぎじゃないの」

灰原 「そんなことねえって。結局アイツは誰かの助けなしには生きられない、弱い人間なんだよ」

桃瀬 「弱い人間かな」

桃瀬、退場

アオキン 「——」

灰原 「おいアオキン、つくしの物、片付けとけ」

アオキン 「——え」

灰原 「ほら」

アオキン、退場

灰原 「これ以上、つくしの事で問題起こしたくないだろ」

赤谷 「それは、そうっすね」

灰原 「お前、そうっすねばかりだな」

赤谷 「そうっすね。あ、やべえ、そうっすねが止まらねえ」

たんぼぼ、登場

たんぼぼ 「おはようございます」

一同 「——」

赤谷 「どうもっす」

たんぼぼ、仕事の確認をする

赤谷、たんぼぼへの嫌悪感を感じて

赤谷 「あ、今日の仕事ッすか。今日は8時からオカッキーっす」

たんぼぼ 「——ありがとっ」

赤谷 「あの、たんぼぼさんの作ったお菓子、食ったんですけど、滅茶苦茶不味かった

っす。でも頑張ろうっていうソウルは感じたんで、ドンマイっす」

たんぽぽ「はい」

灰原 「アオキン、終わったか。早く持ってきて」

アオキン「はい」

桃瀬、登場

アオキン、登場

アオキン「あの、やっぱり出来ません」

灰原 「は」

たんぽぽ「何してんの」

アオキン「つくしさんの物を捨てるようになって頼まれたんだ」

たんぽぽ「これ、つくしのファイルでしょ、つくし戻って来た時に困るよ」

たんぽぽ、「三袋を揃えて」

アオキン「なあ、たんぽぽ、つくしはもう戻ってこないんだよ」

たんぽぽ「戻って来るよ」

アオキン「つくしは亡くなったんだ。だから、もう会えないんだよ」



たんぽぽ 「会えるよ。戻って来るって言ったんだもん」

アオキン 「わかってくれよ、たんぽぽ」

黄瓜 「まだわかんねえのかよ、アオキン、捨てて来い」

アオキン 「――」

たんぽぽ 「だめ」

灰原 「だから言ってるんだろ、良い歳とった大人なんだから、いい加減わかれよ。　　つ  
くしは死んだの、だからもう会えないの」

たんぽぽ 「会える」

茶志内、登場

茶志内 「どうしたの」

たんぽぽ 「つくしは絶対にいる」

間

たんぽぽ 「探してへる」

たんぽぽ、退場

## ○秋の風景描写 後編

ペランタのたんぽぽが綿毛に代わっている。

落ち葉がペランタのアチアチにちらに落ちていく。

## ○秋の夜 後編

2015年 秋夜 雨

雨のしとしと降っている

桃瀬、アオキンがいる

桃瀬、窓、カーテンを閉める

赤谷、灰原、登場

桃瀬 「――」

二人 「ぜえはあぜえはあ」

灰原 「タオルくれ」

桃瀬 「はいはい」

桃瀬、すぶ濡れの二人を見て、タオルを差し出す

黄瓜 「戻りました。いやあ雨酷いな」

桃瀬 「ねえ、たんぼぼさあ、どこにいますか」

赤谷 「どうしたんですか、好きなんです、たんぼぼさんのこと」

桃瀬 「なんでそういうことになんのさ」

赤谷 「でもどこ行ったんでしょね、行くところなんて限られてるはずなのに」

灰原 「——どこ行こうと俺達とは関係ねえよ。俺はさ、思うんだよ。仕事ほったらかして逃げ出すような奴なんだから、所詮たんぽぽと俺らは違うんだって。一緒に働くなんて無理な話だったんだよ。なあ」

赤谷 「あ、そうっすね」

桃瀬 「ねえ、何が違うの、アンタだって得意不得意あるでしょ」

灰原 「俺が言ってるのは働く上での話。アイツは出来る事が少なすぎる」

黄瓜 「——」

赤谷 「つくしさんいなくなって、耐えられなくなったんすよ、現実逃避っすよ、現実逃避」

灰原 「そうそう。前につくしが言ってたよ、たんぽぽは不安になると自分の気持ちを抑えられなくなって暴れたりするときがあるって。俺達は仕事しに来てんの。自分を抑えられないなんて、そんな奴の面倒見切れないだろ」

アオキン 「自分を抑えられなくなる人の気持ちを考えたことありますか」

灰原 「は」

アオキン 「どうして抑えられなくなるのかって言う、たんぽぽの気持ちを考えたことはあ

りますか」

灰原 「なに、じゃあお前はわかるの」

アオキン 「それは」

灰原 「つくしも今のたんぽぽの現状見たらやめろって言うはずさ」

アオキン 「つくしさんがそう思うって、どうして言い切れるんですか」

灰原 「どうしてって、そうだろ。つくしの事だって幾ら言ってもわかんねえみたいだし、なにより、成長のない奴に未来はない」

桃瀬 「成長ね」

灰原 「何だよ」

桃瀬 「たんぽぽさあ、最初は、包装紙切るしかできなかったよね」

灰原 「——まあ」

赤谷 「それがどうしたんですか」

桃瀬 「成長が見えないって言ってたけど、そんな事ないよね」

黄瓜 「それは」

灰原 「成長にも度合ってもんがあるだろう」

桃瀬 「ねえ、たんぽぽ探そうよ」

灰原 「どつしたんだよ、モモちゃんらしくない」

桃瀬 「だって、家族もいなくて、つくしもいなくなって、探してあげられるの私達しかいないじゃん」

アオキン、退場

桃瀬 「ねえ」

一同、押し黙る

アオキン 「たんぽぽ、探してきます」

間

桃瀬 「アオキン、私農家の方、探してみるから。ほら、アンタも」

赤谷 「え、俺っすか」

桃瀬 「車出しなさいよ」

桃瀬 「あ、はいー!!」

桃瀬、赤谷、退場

灰原 「偽善だよ、そんなの」

## ○幼少期の二人（冬）

カーテンに日光が反射して、窓越しの風景が影絵みたいなシルエットで見える

つくし、たんぽぽはシーソーに乗っている

つくし 「昨日の国語のテスト、点数悪くてお母さんとお父さんに怒られちゃった。たんぽぽは何点だった？」

たんぽぽ 「たんぽぽはねえ、０点だった」

つくし 「えー０点!？」

たんぽぽ 「頑張ったんだけど、時間無かった」

つくし 「じゃあ、たんぽぽ的には満点だね」

たんぽぽ 「うん」

つくし 「今度さ一緒に勉強しよ」

たんぽぽ 「うん。でもね、出来ないかも」

つくし 「なんで」

たんぽぽ 「転校することになって。たんぽぽバカだから、つくしともう同じ学校いけないみたい」

つくし 「うそー!! いやだー!!」

たんぽぽ 「たんぽぽには、そっちの方がいいって、お母さんが」

つくし 「一緒にいいよ、わたしだって馬鹿だし。一緒に勉強して、今度は100点取ろう」

たんぽぽ 「もう決まった話なんだって」

つくし 「やだ、やだ、やだ。なんでそんなこと言うの」

たんぽぽ 「たんぽぽの為なんだって」

つくし 「わかんないなあ」

たんぽぽ、空を見て

雪が降る

つくし 「あ、雪」

たんぽぽ 「雪」

つくし 「じゃあさ、じゃあさ、中学校行っても、高校行っても、大人になっても、ずっと友達でいようね」

たんぽぽ 「うん。大人になった、つくしとたんぽぽは、なにしてるかな」



つくし 「そうだねえ、たんぼぼは、将来何になりたいの」

たんぼぼ 「車に乗りたい」

つくし 「車に乗ること？うちのお父さんもお母さんも皆乗ってるよ」

たんぼぼ 「でもね、車に乗るの。つくしは？」

つくし 「私はお菓子屋さんだよ。美味しいお菓子沢山作って、美味しい美味しいって食べて貰いたい」

たんぼぼ 「じゃあ、その時、たんぼぼがお菓子屋さんまで車で送り迎えしてあげる」

つくし 「本当！じゃあ約束ね」

たんぼぼ 「約束」

## ○冬の朝 前編

株式会社アボロ室内 朝

たんぽぽがいなくなってから一週間後

赤谷、桃瀬がいる

赤谷 「あと、たんぽぽさんの特徴ってなんでしたっけ」

桃瀬 「んーとね、緑の服着てるでしょ」

赤谷 「緑の服」

桃瀬 「あとね、顔がヒラメ」

赤谷 「顔がヒラメ」

桃瀬 「あとはねえ」

赤谷 「ていうか、こういうのって写真あれば一発じゃないっすか」

桃瀬 「あー、でもないからさあ、アンタ似顔絵描いてよ」

赤谷 「え、俺っすか、しょうがないなあ、えーっと、たんぽぽさんってどんな顔してましたっけ、よく笑ってましたよね」

桃瀬 「そういえば、そうだね」

黄瓜、灰原、登場

黄瓜 「何、まだそんなことしてんの」

桃瀬 「何悪い？」

黄瓜 「そんな事して意味あんの」

灰原 「お前らのやることじゃないだろ」

桃瀬 「私の勝手でしょ」

赤谷 「出来ました。結構つまらないっすか」

桃瀬 「まって、滅茶苦茶下手糞じゃん。もういい、似顔絵なしで行こう」

赤谷 「えー」

茶志内、登場

茶志内 「おはよう」

桃瀬 「おはようございます」

赤谷 「おさます」

茶志内 「あれ、アオキンは」

黄瓜 「まだみたいですよ、寝坊じゃないですか」

桃瀬 「昨日も夜遅くまで、たんぽぽ探してみたいですよ」

茶志内 「そうだったの。なあ、たんぽぽのやってたオカッキーの仕事さ、赤谷は引き続きで、灰原、たんぽぽの代わり入って」

灰原 「え、まじっすか」

茶志内 「だってしょうがないだろ、代わりにやれる人誰もいないんだから」

灰原 「マジかよ、参ったな。おまえ、足引っ張んなよ」

赤谷 「うっす」

アオキン、登場

アオキン 「おはようございます」

茶志内 「遅刻だよ、遅刻」

アオキン 「あの、たんぽぽいました」

赤谷 「え、いたんすかー!!」

桃瀬 「どこに」

アオキン 「駅の高架下に」

桃瀬 「それで、今、たんぽぽは」

アオキン 「それが」

桃瀬 「たんぽぽ……良かったあ」

たんぽぽ、登場

たんぽぽ 「——」

茶志内 「座れ」

たんぽぽ 「——（座る）」

茶志内 「たんぽぽ、お前、なにしてたんだ」

たんぽぽ 「つくしを探してました」

茶志内 「戻って来たって事は、またここで働きたいのか」

灰原 「え、またこいつ働かせるんですか」

茶志内 「どうなんだ、たんぽぽ」

灰原 「まだ同じことしますよ」

一同 「——」

灰原 「みんなだって、薄々そう思ってたんだろ。辞めろよ、偽善は。こいつだけ何

やっても許されんのか。おい、なんか言えよ」

たんぽぽ 「ご心配おかけして、すいませんでした」

灰原 「お前、口だけだろ。今更謝った所で何も変わらねえよ。仕事舐めてんのか」

たんぽぽ 「ずっとつくし探してて」

灰原 「舐めてんだろ。自分がどんなにキツイ時でも、悲しい時でも、誰かの為に、何かの為に、自分犠牲にしてもやらなきゃいけないのが仕事だろ。働くってそういうことじゃねえのか」

たんぽぽ 「はい」

灰原 「お前がいなくなった間に、どれだけの人に迷惑をかけたか、わかるか。わかんねえよな。だから、すぐに投げ出せるんだよ。つくしがいなくてなんて、人のせいにするなよ。つくしがいなくても自分一人でなんとかしろよ。お前自身に責任感が足りないだけだろうが」

たんぽぽ 「はい」

灰原 「茶さん、俺はこいつがこのまま普通に働くのは反対だから」

茶志内 「なあ、お前の言う、普通ってなんだよ」

灰原 「それは与えられた仕事を、責任を持って最後まで取り組むって事ですよ」

たんぽぽ 「僕に出来る事ならなんでもします。どんな事でもします」

赤谷 「そこまでして、働きたいんすか」

たんぽぽ 「働きたいんです。僕は馬鹿だから、皆さんみたいに働きたいです。だから、お願いします」

茶志内 「もうこんな事しないって、約束できるか」

たんぽぽ 「はい、約束します」

茶志内 「——あとはお前の働き方で判断する」

灰原 「甘すぎませんか」

桃瀬 「ちょっと待って。たんぽぽはどうか自分でやろうとしているよ、それでも出来ないことがあるんだよ」

灰原 「は」

桃瀬 「たんぽぽが出来ない分、私、フォローするからさ」

灰原 「おいおい」

黄柳 「やめとけよ」

一同、間

黄瓜 「それじゃあつくしの二の前になる。俺も手伝つよ。みんなでやれば負担も減る

だろ」

灰原 「どいつもこいつも偽善者ばかりだな」

茶志内 「みんなで働くことが偽善なのか。灰原、たんぽぽもこの社員の一人だろ」

灰原 「——それは」

茶志内 「じゃあ皆仕事行く時間だからハイエース乗って」

灰原、赤谷、桃瀬、茶志内、退場

アオキン 「な、たんぽぽ。つくしちゃんはもう亡くなってるんだよ」

たんぽぽ 「アオキンさん、僕探せなかったんです」

黄瓜 「は」

たんぽぽ 「探したいところ、沢山あったんですけど、探せませんでした。戻って来るから  
って言ってたのに。つくし、嘘つきだ」

黄瓜 「それは違つ」

たんぽぽ 「でも戻ってくるって言ったんですよ」



黄瓜 「だから、それはー。なあ、アオキン、こういう時どう言えばいいんだよ」

アオキン 「それは、わかんないですよ。例え話してもわかって貰えなくて。つくしはつくしだよ、の一点張りで」

黄瓜 「どうすんだよ」

黄瓜、ペランダを見て

黄瓜 「おい、たんぼぼ、ここにつくし生えてたの覚えてるか」

たんぼぼ 「覚えてる」

黄瓜 「ここに生えてたつくしは大きくなって、花を咲かせて、今は役目を終えて、土の中にいる。意味わかるか」

たんぼぼ 「わからない」

黄瓜 「なんでわかんねえんだ、花も人も一緒にして事」

たんぼぼ 「え？花も人も一緒？」

黄瓜 「そつ。つくしはつくし」

たんぼぼ 「前につくしも同じこと言ってた、お母さんが亡くなった時にも」

黄瓜 「そうだったのか」

たんぽぽ「——ウン。でも、だったら、そうなる前に、もっと色んなことしたかったなあ——。一緒にご飯食べたたり、一緒に遊んだり、一緒に働いたり、一緒にドライブしたり——夢が——夢が叶わなくなっちゃった。どうしよう、黄瓜さん、アオキンさん」

黄瓜「つくしと何約束したのか知らねえけど、そのために戻って来たんだろ。じゃあ

それを実行しろよ。お前みたいな馬鹿でも任された仕事があるんだから。なっ」

アオキン「あ、はい」

黄瓜、退場

アオキン、出発の準備をする

たんぽぽ「——アオキンさん」

アオキン「なに」

たんぽぽ、綿毛に近づいて

たんぽぽ「バカってどついう意味ですか」

## ○冬の風景描写 前編

ペランダに明かりが絞られていく  
外は雪が降っている

## ○冬の夜

株式会社アボロ室内 夜

2015年 冬 夕方 晴れ

灰原がいる

「オカッキーのテーマ」が流れている

オッカッキーショーのワンシーン

灰原 「用意出来たら始めて。よーい、はい」

たんぽぽ 「はいー!」

オカッキー、登場。

オカッキーの着ぐるみを着たたんぽぽがお米ダンスを踊っている

灰原 「皆さんこんにちは。オカッキーが遊びに来たよ。風が丘公式キャラクターオカッキー。おかきので街を元気に。米に込めた思いは不可能を可能にする——えっと…」

灰原、リモコンでDVDを止める

オカッキーのテーマが止まる

たんぽぽ 「どうですか」

たんぼぼ、オカッキーのダンスを辞める

灰原 「まあ、許容範囲何じゃないの。最悪動かなくてもいいって言われてんだろ」

たんぼぼ 「ありがとうございます」

灰原 「赤谷の野郎、マジム力つくわ」

たんぼぼ、オカッキーを脱いで、外の所定の位置に置く

たんぼぼ 「オカッキー君にはオカッキーママとオカッキーパパそして…」

灰原 「言わなくていいから」

たんぼぼ 「はい」

灰原 「誰だよ、こんな長いナレーション考えた奴」

たんぼぼ 「つくしも覚えてませんでした」

灰原 「アイツは不器用だったからな、でも俺は違う。えっと、オカッキーは…」

たんぼぼ 「オカッキーは風が丘のお米農家の家で生まれました」

灰原 「わかんねえ奴だな、だから言っなって言っただろ。えっと…続きは」

たんぼぼ 「おかきというのは餅を小さく切り、乾燥させたものをきつね色になるまで炙った米菓です。小さく切るとい言葉が欠くとい言葉に変わり、小粒なものをあら

れと呼びますが、本来はもち米をそのまま炒ったものをあられ、なまこ餅というナマコに似た形状に成形された餅を切って干し、乾いたものをおかきと呼んでいました。しかし、現在では同じ餅を原料とした焼き菓子を大きさで区分していたに過ぎません。風が丘の水田で育てられたブランド米、ユメピリカ。「夢」というアイヌ語で美しいという意味の「ピリカ」を組み合わせて「ユメピリカ」と名付けられました。おかきは戦国時代、豊臣秀吉の好物とされ、太閤となっても間食として肌に離さなかったそうです。なお、おかきとあられの区分はJAS規格などに定められたものではなく、おおよその大きさで呼び方を変えているだけで、明確な基準はありません。焼く代わりに油で揚げたものを、揚げおかきと呼ぶこともあります。本来はうるち米で作るものが煎餅、おかきやあられは餅米で作ります」

灰原 「お前、全部覚えたのか」

たんぽぽ 「はい」

灰原 「お前の役割じゃないだろ」

たんぽぽ 「必要かなって」

灰原 「そっか」

たんぽぽ 「たんぽぽにも出来たんだから、灰原さんにも出来るよ」

灰原 「余計なお世話だよ」

たんぽぽ 「はい」

灰原 「かきというのは餅を小さく切り、乾燥させたものをきつね色になるまで炙った米菓です。小さく切るという言葉が欠くという言葉に変わり……だめだ」

たんぽぽ 「もう一回」

灰原 「うっせって」

たんぽぽ 「出来ない事、出来るようになったら嬉しいよ」

灰原 「なに偉そうに言ってるんだよ」

たんぽぽ 「はい」

灰原、思い出そうとするがセリフが途切れ途切れになる。

たんぽぽ、灰原が止まったら補助を入れて行く

灰原 「小粒なものをあられと呼びますが、本来はもち米をそのまま炒ったものをあられ、なまこ餅というナマコに似た形状に成形された餅を切って干し、乾いたものをおかきと呼んでいました。しかし、現在では同じ餅を原料とした焼き菓子をおかきで区分していたに過ぎません。風が丘の水田で育てられたブランド米、ユメピリカ。「夢」というアイヌ語で美しいという意味の「ピリカ」を組み合わせて

「ユメピリカ」と名付けられました」

黄瓜、登場

黄瓜が手招きをして、桃瀬、赤谷、茶志内、アオキン、登場

灰原、徐々にたんぽぽに頼る

灰原

「おかきは戦国時代、豊臣秀吉の好物とされ、太閤となっても間食として肌に離さなかったそうです。なお、おかきとあられの区分はJAS規格などに定められたものではなく、おおよその大きさで呼び方を変えているだけで、明確な基準はありません。焼く代わりに油で揚げたものを、揚げおかきと呼ぶこともあります。本来はうるち米で作るものが煎餅、おかきやあられは餅米で作ります」

間

たんぽぽ「やったー灰原さん、来週よろしくお願いします」

灰原「あ、ウン」



## ○冬の風景描写 後編

ペランダに明かりが絞られていく  
外は雪が降っている

## 〇冬の朝 後編

株式会社アボロ室内 朝

2015年 冬 夕方 晴れ

赤谷、たんぽぽがいる

赤谷 「この柿食います」

たんぽぽ 「——はい」

赤谷 「ここの柿、ちょっと甘いんですよ」

たんぽぽ 「うまい」

赤谷 「たんぽぽさん、働いてて楽しいっすか」

たんぽぽ 「たのしいよ」

赤谷 「最近たんぽぽさんは凄いですよ。なんていうか皆変わったって」

たんぽぽ 「——」

赤谷 「俺ここで働いてて思うんですよ。自分がないというか、流されてばかりという  
か」

たんぽぽ 「——」

赤谷 「仕事だから、つまらない事だってあるっていうのはわかってはいるんですけど」

たんぽぽ 「楽しいよ」

赤谷 「二つ聞いてもいいですか」

たんぽぽ 「——」

赤谷 「どうやってたらそうやって出来るんですか」

たんぽぽ 「——何言ってるのかわかんない」

赤谷 「たんぽぽさんはこう言っちゃ失礼かもしれないけど、やれない事多いのに毎日楽しく働いていて」

たんぽぽ 「？」

赤谷 「俺が同じ立場だったら、やっぱりたんぽぽさんみたいには働けないですよ。羨ましいですよ、ホント」

たんぽぽ 「ごちそうさまでした」

赤谷 「あ、はい。まあ、今言ったこと、そんなに気にしないでください」

たんぽぽ 「赤やん」

赤谷 「なんすか」

たんぽぽ 「たんぽぽは、ばか」

赤谷 「——え」

たんぽぽ 「赤やんも、ばか」

赤谷 「ええ」

たんぽぽ 「赤やんは、笑顔がいい所」

茶志内、黄瓜、灰原、桃瀬、登場

茶志内 「いやあ、みんなどうもありがと」

灰原 「いえいえ」

赤谷 「どうしたんすか」

桃瀬 「いや、茶さんの車が吹き溜まりに突っ込んだじゃって」

赤谷 「あーそうだったんすか」

黄瓜 「お前も手伝えよ、バカヤロウ」

赤谷 「すいませーん」

黄瓜 「いやあ、こういう寒い時は鍋なんか食べたいたすねえ」

桃瀬 「そっぴや最近皆で飲んでもいないねえ」

黄瓜 「どうですか、年末に忘年会でも」

茶志内 「いいね」

黄瓜 「うちそうさまです」

茶志内 「いやいやいや、どうせならここでやろう。どこもいっぱいだし、夜開いてる店もないし。じゃあ、用意諸々、灰原頼むわ」

灰原 「え、俺っすか。じゃあ、たんぽぽ、お前は行くよな」

たんぽぽ 「はい」

茶志内 「おい、アオキン」

アオキン 「——」

茶志内 「青木」

アオキン 「はい」

茶志内 「飲み会来いよ」

アオキン 「はい」

黄瓜 「なあ、たんぽぽ、何やってんだ」

たんぽぽ 「車の免許取る勉強」

桃瀬 「えーたんぽぽに取れんの」

たんぽぽ 「取れる」

灰原 「どうだろうね」

黄瓜 「今度さ、つくしの所、連れてってやるよ」

たんぽぽ 「いい」

黄瓜 「なんで」

たんぽぽ 「自分の力で行きたい」

黄瓜 「じゃあ、行けるようになったら、その時連れてってくれよ」

たんぽぽ 「わかりました。じゃあ皆乗せて行きます」

茶志内 「じゃあ、皆仕事行く準備して」

全員 「はい」

会社の固定電話が鳴る

茶志内 「はいはい——」

赤谷、桃瀬、灰原、黄瓜、茶志内、退場

アオキン「なあ」

たんぼぼ「なんですか」

アオキン「僕、たんぼぼの事見てたらさ、思い出した事があって。小さい頃、遠足とかクリスマスとか、誕生日とか、凄いい待ち遠しくて。毎日過ぎていくのがすごくゆっくりでさ。そのゆっくりって、嫌なモノでは決してなくて。でも、大人になるにつれ、一年があつという間で。時間の感覚のズレっていうのかなこういう感覚、最近なかったなって」

たんぼぼ「——何言ってるのかわかんない」

アオキン「あ、そう」

たんぼぼ「アオキンさんはここで働いていて面白い」

アオキン「面白いかわからないか、なんて考えた事ないよ、僕は就職して恵まれてるからそんな事考えちゃいけないんだって思ってた」

たんぼぼ「——何言ってるのかわかんない」

アオキン「あ、そっか」

たんぼぼ「ここにいる皆さん、良い人たちですよね」

アオキン「中にはそうじゃない人もいるけどね」

たんぽぽ「え、誰ですか」

アオキン「いや、いいじゃない」

たんぽぽ「誰ですか」

アオキン「じゃあ僕は仕事の準備があるから」

たんぽぽ「逃げるんですか。アオキンさん、あの橋の下で言ったじゃないですか、逃げん  
なつて」

アオキン「いや、それはそれ。これはこれ」

たんぽぽ「なんですかそれ」

アオキン「いいや、じゃあホントに準備行くわ。またあとでね」

たんぽぽ、机に座って

たんぽぽ、つくしのあった場所を見て

たんぽぽ「——つくし」

暗転



## ○数年の経過

2015年から

音楽と共に数枚の写真のようにシーンが展開される  
入れ替わる春、夏、秋、冬の季節。

音楽も季節の経過とともに盛り上がっていく

## ○数年の経過（春 1）

灰原、アオキン、たんぽぽ、黄瓜、桃瀬、赤谷、茶志内がいる

灰原 「おい、アオキン、早くしろ」

たんぽぽ 「はい」

黄瓜 「――」

茶志内 「どうしたの」

黄瓜 「スピード違反で駐禁取られちゃって。お金貸してください」

茶志内 「俺、無理」

桃瀬 「私も」

赤谷 「俺も無理っすよ」

黄瓜 「なあ、たんぽぽ、金貸して」

たんぽぽ 「無理です」

## ○数年の経過（夏）

黄瓜、灰原、たんぽぽがいる

黄瓜 「仮免落ちたのか、俺だってさ、5回くらい落ちたよ」

たんぽぽ 「本当ですか」

黄瓜 「灰原も…まあ、あいつは無難にこなしてるか」

灰原 「俺、仮免3回落ちたよ」

黄瓜 「まあ、次頑張れや」

灰原 「はい、頑張ります」

## ○数年の経過（秋）

灰原、アオキン、たんぼぼ、黄瓜、桃瀬、赤谷、茶志内がいる

一同、ハッピーバースデーの歌を歌う

赤谷のサプライズパーティ

拍手

たんぼぼ「おめでとー」

赤谷「うわあ、どうもっす、ありがとうございますー!!」

茶志内「お前ここ来てどれくらい経った」

赤谷「えっと、たんぼぼさんと同じ時に来たので」

茶市内「へえ、もっそんなに経ったんだんだねえ」

## ○数年の経過（冬）

灰原、アオキン、たんぽぽ、黄瓜、桃瀬、赤谷、茶志内がいる

赤谷 「マジっすかオカッキー？」

茶志内 「何が流行るかわからないねえ」

桃瀬 「たんぽぽのおかげじゃない」

灰原 「俺は認めないぞ」

黄瓜 「これで風が丘も安泰だな」

アオキン 「これから忙しくなるね」

たんぽぽ 「はい」

## ○数年の経過（春 2）

宴会の一場

灰原、アオキン、たんぼぼ、黄瓜、桃瀬、赤谷、茶志内がいる  
下手糞だけど、全員で楽しんで演奏する

一同、田を囲み、飲み騒いでいる

たんぼぼが鈴の音を鳴らす

みんなが和解することが出来た

暗転

音楽が収まっていく

## ○夢 別れ

一同、寝ている。

黄瓜、灰原、桃瀬、たんぼぼ、茶志内、青木、赤谷がいる  
ペランタにあるオカッキーが突然動き出す

たんぼぼを見つけて、起こす

たんぼぼ 「なに誰は入ってんの」

たんぼぼ、オカッキーを取る

つくし 「ジャジャジャジャーン」

たんぼぼ 「ええー!!」

つくし 「元気」

たんぼぼ 「——なんで」

つくし 「おかき力で街を元気に、米にほにやららー!!」

たんぼぼ 「米に込められた思いは不可能を可能にする?」

つくし 「そういうこと」

たんぼぼ 「あ、そっか」

間

つくし 「ねえ、何か喋れよ」

たんぽぽ 「ああ。寒くない、その恰好」

つくし 「ちよっとね」

たんぽぽ 「待ってて。コーヒー持ってくる」

つくし、皆に毛布を掛ける

たんぽぽ 「はい、コーヒー」

つくし 「ありがとう」

たんぽぽ 「あとさ、たんぽぽお菓子作ったんだけど、食べない」

つくし 「——食べる」

たんぽぽ 「みんなからは不味いって不評なんだけど」

たんぽぽ、お菓子をつくしに渡しながら

つくし 「私が採点してあげる」

たんぽぽ 「怖いなあ」



つくし、お菓子を食べて

たんぽぽ「どっ？」

つくし「これさ、砂糖の配合逢ってる」

たんぽぽ「合ってると思うけど」

つくし「あ、これわかった。均等に混ぜてないんだよ。所々甘味が違うモン」

たんぽぽ「何点？」

つくし「〇点だけど、花丸あげちゃう」

たんぽぽ「なんで、どういこと」

つくし「まだまだ私みたいになるには修業が足りないけど、たんぽぽの一生懸命さには花丸あげましょう」

たんぽぽ「やった」

つくし「もっともっとだかね」

たんぽぽ「うん」

間

つくし「みんなでワイワイやって楽しかったでしょう」

たんぽぽ「うん、すんごい楽しかった」

つくし「それは良かった」

たんぽぽ「つくしも来れば…」

つくし「私はもう行けないからさ」

たんぽぽ「——そう」

間

つくし「本音言うとさ、たんぽぽの事が不安で」

たんぽぽ「——」

つくし「これからもっと大変な事沢山出て来るよ。そう思ったら心配でさ」

たんぽぽ「心配いらないよ、ちゃんと一人でやって行けるよ」

つくし「我慢出来なくなっちゃう事だって、あるかもしれないよ」

たんぽぽ「それは」

つくし「私が傍にいてあげられたらいいんだけど」

間

たんぼぼ「もう、つくしが傍に居なくても平気だよ」

つくし「でも」

たんぼぼ「あのね、もうすぐ車買うの」

つくし「車？」

たんぼぼ「これ、黒のジープ」

つくし「ごついね、こんな車に乗れる——」

たんぼぼ「乗れる——」

つくし「免許だって取るのも——」

たんぼぼ「取れる——免許取って、この車に皆乗せて、つくしの所に会いに行くから」

つくし「うん」

たんぼぼ「つくしが出来なかったこと、やりたかったこと、たんぼぼが代わりに全部やるから——！時間はかかるかもしれないけど、たんぼぼ、バ力なりに一つ一つやって行くから——！だから、だからさ、多少ハラハラするかもしれないけど、安心して  
よ」

つくし「わかった」

たんぽぽ「それが、たんぽぽの今の夢なんだ」

つくし「——いいね」

たんぽぽ「でしょう。じゃあさ、こんなしみったれた話はこれくらいにして、久しぶりになんかして遊ぼう」

つくし「いいよお」

たんぽぽ「じゃあさ、かくれんぼしよう」

### 音楽「夢」

つくし「凄い、ひっさしぶり!—!」

たんぽぽ「でしょ」

つくし「じゃあ、たんぽぽが鬼ね」

たんぽぽ「わかった」

たんぽぽ「1 2 3 4 5 6 7 8 9 10」

つくし「早いよ」

たんぽぽ「1—2—3—4—5—6—7—8—9—10」

つくし「——」

たんぽぽ「もういいかい」

つくし「まーただよ」

たんぽぽ「もういいかい」

つくし「まーただよ」

たんぽぽ「もういいかい」

つくし「まーただよ」

たんぽぽ「もういいかい」

つくし「まーただよ」

たんぽぽ「もういいかい」

つくしがたんぽぽの周囲から消える

つくし、退場

たんぽぽ「もういいかい、もういいかい、もういいかい、もういいかい」

たんぽぽ、オカッキーを元の位置に戻して

たんぽぽ、つくしの食いかけのお菓子を食べる

たんぽぽ「——もついいよ。ありがとーありがとー!」

音楽がそと入る

暗転

## ○数年後の春

数年後の春 朝 晴れ

灰原、黄瓜、アオキン、桃瀬、灰原、赤谷、たんぼぼ

一同の働いている様子

みんな、笑顔

茶志内 「それじゃあ、皆さん、今日も一日よろしくおねがいします」

一同 「よろしくお願ひします」

灰原 「おい、たんぼぼ、早くしろ資材、積み込め」

たんぼぼ 「はい」

アオキン 「すいません」

黄瓜 「よし、全員積み込みしたか」

赤谷 「うーっす」

黄瓜 「モモちゃん、行くよー」

桃瀬 「はーい」

黄瓜 「今日は田植えだからきちいぞ」

桃瀬 「まじでー」

赤谷 「やつほーい」

黄瓜 「じゃあ農家班、出発しまーす」

黄瓜、退場

赤谷 「いやあ、今日もキツそうっすねえ」

赤谷、退場

桃瀬 「ちよっと待って。行って来まーす」

桃瀬、退場

アオキン 「たんぼぼ、ありがとう。奥にまだあるんだ。それお願い」

たんぼぼ 「わかりました」

アオキン、退場

灰原 「なあ、たんぼぼ、今日運転してみるか、いいよね、茶さん」

茶志内 「大丈夫」

たんぼぼ 「はい！ー！やります」



灰原 「じゃあ、よろしく」

灰原、退場

茶志内 「たんぽぽ、安全運転でよろしくね」

会社の固定電話が鳴る

茶志内、退場

茶志内 「はいはい、こちら株式会社アポロで御座います」

たんぽぽ 「——あ」

たんぽぽ、退場

たんぽぽ、つくしとたんぽぽが並んでいるのを見つめる

つくし、登場。たんぽぽに寄り添う。

灰原 「おーい、早くくる」

たんぽぽ 「はーい……今行きます」

たんぽぽ、退場

ハイエースの車が出発するエンジン音がする

つくし 「——」

つくし、たんぽぽの後姿を見つめ、咲いているタンポポ、そして太陽を見つめる。

車の急ブレーキ音がする

音楽が突然止まる

灰原 「何やってんだ」

たんぽぽ 「すみません」

つくし、そのやり取りを見つめて、笑っ

つくし 「たんぽぽは、ばかだねえ」

音楽が再び流れる

ペランタのたんぽぽがそよ風揺れている

これから楽しい事が待っている。

暖かな雰囲気の中、新たな旅の予感を匂わせながらこの物語は終わる。

暗転

完

## あとがき

構想から、取材、調査、脚本制作、稽古、劇場入り、本番。正直最後まで気の休まる暇もなく、慌ただしく過ぎていく毎日でした。制作中に悩み、真夜中に夜道を歩き回ったり、公園のベンチに仰向けになって唸っていたこともありました。アイデアが降ってくるのを待っていたんです。でも、そう簡単に良いアイデアは降ってきたりはしませんでした。多くの方々の支えや協力によってこの作品を作ることが出来たのは言うまでもありません。毎度のことですが、僕はこの作品も作らせて頂いたと解釈しています。本当に、本当にどうもありがとうございます。

今回の（baka）の構想のきっかけとエピソードについて少々お話ししたいと思います。構想のきっかけは「ばか」という言葉でした。この事は新聞やパンフレットでも触れさせて頂きましたが、詳細をお話すると、とあるお爺ちゃんとの出会いがきっかけでした。とある日の深夜にコンビニのイトインで、別の公演の台本の直し作業を行っている時、お爺ちゃんが話しかけて来てくれました。「テレビを買い替えたら、ビデオが見えなくなって困っている」とのことでした。機械に強くない自分ではありますが、そのお爺ちゃんが本当に困っているようだったので、出来るかわかりませんが、お爺ちゃんの家に向かったのです。そのビデオに録画された作品は、山田洋二監督作品、渥美清さんが主演の男はつらいよ。そのビデオが映った瞬間に、お爺ちゃんが仰っていたことが、今回の「ばか」の起源でした。「この渥美清の男はつらいよを見ると、嫌なこと全部忘れちゃうんだよ。この虎（渥美清さんが演じる主人公）は「ばか」なんだ。何度も同じことで失敗する。でも、この「ばか」を見ると、明日も頑張ろうって思えるんだ。これを見るのが、今の俺の生き甲斐なんだ」幸い、単純な機械操作でビデオは見れるようになり、深夜にお爺ちゃんと二人で喜び合っていたその経験こそが、今振り返ると、はじまりだったように思います。日常、何が起こるか分かりません。毎日の何気ない出来事こそが、大きな宝物になると思えてならない昨今です。それか

らは「ばか」という言葉を様々な角度から模索して行きました。時折、相手に「ばか」と言われて落ち込み、そして友人と「ばか」な話をして楽しんだり、日常生活の中で、僕も大変お世話になっている言葉の一つです。その中で、気になったのが、人物が「ばか」という事例。「ここから取材や、調査が始まります。正直、恥部を晒すようで、恥ずかしい部分もあるのですが、取材を通してどのように作品が変わっていたか、どんなことを伝えなかったのか、企画意図を掲載したいように思います。制作中、何度も迷ったり、立ち止まった時に、見返していた文章です。

#### 【企画意図】

この物語で何を描きたいか。それは「ばか」（知能が劣っている者）でも人を幸せにすることは出来ないか。という一つの問いです。現在の社会は、今も私とその社会を体験している一人として思うことは、資格や目に見える技術等、その場で判断される事柄が何よりも重要視される社会のように思います。これは社会の中で生きていく上で必要なことで、否定する気は毛頭ありません。ただ、そこに成長や進歩を見据えている方々が何人おりますでしょうか。ある意味で反比例する、この2つの事柄はバランスがとても難しい。成長が見えないことでクビを切られる。こういった事例も一方で納得してしまう自分もいるのです。でもここで、もう一度、立ち返ってみたいと思いました。成長が見えないという判断基準は何なのでしょうか。人それぞれ出来ること、出来ないことは十人十色。その判断基準をあなたは何にしていますか。取材の中で就労支援施設の館長の方が仰っていた事があります。「パソコン検定〇級は時間の制約があるため受かりません。しかし僕よりもパソコンを使いこなしている人がいます。」「出来ないんじゃないんです。今は、出来ていないだけなんです。シュークリームの袋を切るのに一週間かかります。一週間経ってその作業が出来るようになって、また次の出来ることを探して行った人もいます。」私達の中に、いつの間にか、施設の館長の方が仰る、成功の併走という考え方は影を潜める事が多いのではないかと思うのです。出来事の大小は関係ありません。ただ、成功への喜び、前進することの喜びというのは、多くの方々が一度は経験していることではないでしょうか。これまでのあなたの日々の生活の中で、あなたにあったことを思い出してみて下さい。

ただ、それらは月日と共に感動は薄くなっていきます。しかし、その時自分の中に感じた感動は、原体験として確実に残っているのではないかと思うのです。その原体験に語りかける作品を作りたいと思いました。中でも、障がい者と呼ばれる方々は、その成長や進歩の部分に、世間は着目されていないように思えてなりません。頭の中で考える、障がいを持っているからという、世間の健全者と呼ばれる方と比較して生まれる偏見。先程の館長の方のお話からも、おわかりになる通り、その偏見は一個人という視点で見られる訳ではなく、あるカテゴリー化された者の中の一人という、一人の人としての見方ではないように思えてならないのです。

今一度、このような社会で生きている私達だからこそ、もう一度、色々な個性、属性、特性を持った人と日常触れ合っているんだという事を、振り返る時間があっても良いのではないかと思うのです。これは何気なく過ぎていく日常の中では、なかなか難しいかもしれませんが。ただ、これが、この作品が、その考えに触れる何かのきっかけになれば。その願いを一人の青年に託し、その職場の人々も巻き込むことで、それぞれの人物の、物事に対する向き合い方に小さな変化を与えられるような。そのような作品にしたいと考えています。成功への併走というのは言葉では簡単に言い表す事が出来ますが、容易な事ではありません。大変な精神的苦勞、肉体的苦勞を伴うことです。現場の方々が体験されている、その苦勞は計り知れません。しかし、その方々に寄り添いたいと強く思いました。成功への併走という側面から見えてきた、現実を踏まえた上で、そこから見えてくる希望というのは、僕の作品づくりの上で、一貫して大切に行っている事柄です。人間としての面白みを作品の中に散りばめつつ、人と人とが触れ合う事を大切に、その人間関係の変化を描く。以上の事を踏まえて、作品に向き合って行きます。

「月二日（月） 竹原 圭一

——衝動的に真面目な文章ではありませんが、これが事実です。制作中、この文章こそが僕の、道しるべでした。観て下さった方が、この通り伝わったのが正解だとか、そんなことをいう気は毛頭ありません。ですが、制作中に迷路に迷い込んだ時にはこの文章を見返して、何度も作っては壊し、作っては壊しを繰り返していました。

取材を行う中で、「おちよくるのか」とお叱りを受けたこともあります。この作品の内容のお話をして、「内容変えたら？」と釘を刺されたこともありました。ただ一方で、こんな何処の馬の骨ともわからない若造に、今の就労の現実や、実際に自分にあつた体験談や夢などを丁寧に話して下さった多くの方々の言葉が、なにより原動力になった事は言うまでもありません。真剣に取り組むこと、そして作品作りを楽しむこと。なかなか難しい塩梅ではありますが、多くのことを教えて頂いた制作期間でした。最後に。少々、というか、かなり長くなってしまいましたが。こうして作品を多くの方々に観て頂いて幸せでした。多くの方々とのかけがえない出会いが、なにより宝物でした。

…この文章を書いたのが、今から4、5年前。

あれからというものの、僕らを取り巻く状況は大きく変わりました。

それは、RED KING CRABとしても、世間としても。

世間は平成が終わり、令和に突入。きつと時代設定を今にすると、舞台である風が丘、そして登場人物のたんぽぽやつくし、株式会社アボロの面々の生活環境も大きく変わっているかと思えます。

一方、その数年間にRED KING CRABも大きく変わりました。

団員だった能登屋 駿介は東京に活動拠点を移すため退団。その後、能登屋ヒビ丸に改名し、今も東京で精力的に活動しています。

そして、この時、タンポポ役を演じた石橋 徹城は次の公演でRED KING CRABに入団し、今年結婚し、お芝居をお休み中。

そして、茶志内を演じた木山 正太は、木山 正大に改名し、この公演の二年後に劇団に入団しました。この時はまだ劇団員ではありませんでした。

その後、製作や役者志望で入団したメンバーもいます。

ああ、数年しか経っていないのに諸行無常。

みんな元気かな。

このお芝居は三日等映像に残っていません。でも、形に残らない、儚いものであるからこそ、舞台の魅了というものはあるんじゃないかな、と僕は思うのです。

改めて読み返すと、かなり恥ずかしい部分が多いです。

RED KING CRAB はまだまだです。至らない点も多いです。だから、これからもっともっと、面白いと思って頂ける作品を創って行きます。

あの製作期間、稽古期間、「あーでもない」「こーでもない」と役者、スタッフ皆で、最後の最後まで、諦めず、喧嘩しながら、もがきながら必死に向き合って創って行きました。

ご興味を持たれた方は、是非、舞台を観に来てみて下さい。きっと、何か、今まで気付かなかった、「面白い」が見つかるのではないかと思います。

最後に、この本を手にとって下さってありがとうございます。最初の文章でも自分が言っていますが、この作品は僕にとって、創らせて戴いたものだと思っています。それは観に来て下さる方々、支えて下さるスタッフ・役者の皆さんがいて下さるおかげで、作品を創らせて頂いているという事。その気持ちは、扱うテーマや題材が変わっても、変わりません。

何か落ち込んだ時、悩んだ時、少しでもこの「baka」という作品が、元気になる力になれば、こんなに嬉しい事はありません。

この公演に携わったすべての方々を代表して言わせて頂きます。本当にどうもありがとうございました。

RED KING CRAB 第III回公演 「(baka)」公演詳細

○あらすじ

「この物語は、最愛の人をなくした、とある男の自立の物語。」

○キャッチコピー

「テストは0点 愛情満点……」

○場所

演劇専用小劇場 BLOCH(札幌市中央区北3条東5丁目5 岩佐ビル1F)

○日時

|           |       |                 |
|-----------|-------|-----------------|
| 十一月十三日(金) | 20:00 |                 |
| 十一月十四日(土) | 14:00 | / 20:00         |
| 十一月十五日(日) | 13:00 | / 18:00(全5ステージ) |

○出演

|                        |       |        |       |       |
|------------------------|-------|--------|-------|-------|
| 能登屋 駿介 (RED KING CRAB) | 湊谷 優  | 塚本 奈緒美 | 石橋 徹城 | 木山 正太 |
| 和泉 諒 (劇団 fireworks)    | 高野 紗綾 | 大湊 敬太  | 竹原 圭一 |       |



○作・演出

竹原 圭一

○照明

鈴木 静悟

○音響

江口 隆昭

○舞台美術

米澤 春花（劇団 fireworks）

○小道具

蝦名 里美（CLORE）

○小道具補佐

松浦 ひかり

○作曲・演奏

山崎 耕佑（劇団 fireworks）

○演奏指導

大倉 まみこ

○宣伝美術

チャ ゲンタ

○製作

小川 しおり (劇団 fireworks)

細谷 史奈



# RED KING CRAB

|     |               |
|-----|---------------|
| 著 者 | 竹原 圭一         |
| 発行者 | RED KING CRAB |
| 発行日 | 平成30年11月26日   |